
狐、閃光となりて.....

菖蒲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐、閃光となりて……

【Zコード】

Z5681A

【作者名】

菖蒲

【あらすじ】

某少年誌で超人気連載中の作品、NARUTOの再構成です。色々と原作と違うことが平気で起こります。

プロローグ

「四代目… 下がるのじゃ。」
「…」

突然の九尾来襲により、壊滅寸前にまで追い込まれた木の葉隠れの里。その炎上する街中で、三代目火影は声を荒げた。その眼に写るのは、未だ破壊を続ける悪魔と、それにたつた一人で挑もうとする、この里の若き長『四代目火影』。

「ダメですよ、三代目。このケリは私が着けます」
「じゃが…」

三代目は、この若者が何をしに行くのかを知っていた。そして、その結果も。このままこの若者を行かせれば、そこに待ち受けるのは死。この若者を死なせるくらいなら、自分が変わりに行きたかった。しかし…。

「三代目、あれの強さは人知を超えてます。失礼とは思いますが、
今の三代目では太刀打ちできません」

「むう…」

そう、全盛期ならいざ知らず、今の年老いた身では、あの術を発動する段階にまで持つていくことすら出来ないので。その前に殺されてしまつのがオチである。

「それに、あなたにはこの里を護つてもらわなければならぬ。それを頼めるのはあなただけなんです」

「しかし……」

「三代目、今の火影は私です。私には里を護る義務がある。それに……」

渋る三代目曰、四代目は諭すよつてやつてつて、一田の葉を切った。

「『木の葉の同朋は俺の体の一部一部だ』初代様の言葉ですが、気持ちちは私も同じです。私個人としても、里の皆を護りたい。そして私にはそれができる力がある」

「四代目、お主……解った、頼む」

初代の言葉を出し、自分の決意を語る四代目曰、三代目はもはや何も言う事はなかつた。気持ちは自分も同じ。それだけに、これ以上は四代目の決意に水を差す事になる。三代目は、そう判断したのだ。

「三代目、後は頼みます。そしてお願いがあるのですが、これを」

三代目の言葉に満足したのか、四代目は優しい微笑で答えると、画卷物を一つ取り出した。見ると、それには何かの術式が施してある。

「これは？」

「私の術を收めています」

「なんじゃとー？」

三代目が驚くのも無理はない。四代目の術は、飛雷神の術をはじめ、その多くが謎のベールに包まれている。それがいきなり目の前に出されたのだ、驚くなと言つ方が無理である。

「ああ、大丈夫です。それは特定のチャクラの持ち主にしか開けられないようにしています。それでお願いというのは、それが反応したチャクラの持ち主にその巻物を渡してやってくださいませんか？」

「う、うむ、承知した。しかし特定のチャクラというのは……」「それは申し訳ありませんが言えません。ですが、三代目だからこそ、お願いします。どうかその者が現れたら、それを渡してやってください」

四代目が自分の術を渡すほどの人、その人物に非常に興味が湧いたが、三代目は追求せずに、ただ頷いただけであった。その反応に、嬉しそうに微笑すると、四代目はその場から姿を消した。

瞬身の術など比べ物にならないほどの移動速度、恐らく飛雷神の術だろう。里の者は知らないが、四代目は、里周辺のあちこちに術式を施しておいたのだ。

「四代目、すまぬ」

三代目の自責するような呟きが、炎上する街中に、やけにきれいに響き渡った。

一時間後、今までそこにあった九尾の姿が突然消え失せた。四代目の術が発動したのだ。

「終つたか……」

周りが喜びを露にしている中ひとり、寂しそうに呟いた三代目は、数人の部下を引き連れ現場の確認へ赴いた。

「……四代目」

一昨日まで木が生い茂っていたその場所には、もはや何も残されてはいなかつた。あるのは脇腹をじつそり抉られ、片足を失つた四代目の亡骸と、もう一つ。

「赤子じやと？」

この淒惨な場に全く似つかわしくない、一人の赤ん坊だけだつた。この状況にも関わらず、すやすやと穏やかな寝息を立てながら眠つてゐる。

「一体これは……何！」

何故こんな所に赤ん坊がいるのかは解らなかつたが、放つて置く訳にも行かないでの三代目が近づいた時、それは起こつた。

四代目から受け取つたときから手に持つたままだつた巻物に書かれた術式が、突如光り始めたのだ。四代目はこの術式は特定のチャクラにしか反応しないと言つた。という事はつまり……

「この子が、四代目が術を托した者」

という事になる。そして不可解な事がもう一つ。その赤ん坊の腹に、封印式が書かれていたのだ。

(状況から考えて、この封印式を書いたのは四代目じやうう。しかし、普通は赤子にそんな事をする必要は無いし、暇も無かつた筈じや。しかし四代目はそれをしてた。この場でそんな事をする必要があるのは……九尾の封印か！)

そこまで考え、三代目はこの赤ん坊の正体を悟った。

「四代目の子か……」

大体、九尾を封印するというのに他人の子を使える筈が無い、更にこの子に四代目は自分の術を残した。これだけ揃えば、答えを見つけるのは容易であった。

それにしても、これからが大変だ。三代目は頭を抱えた。この子が四代目の子であることを里に伝えるわけにはいかない。大体推測はできるが、証拠が無いのだ。そんな事を公表するわけにはいかない。

それに、九尾を封印された子であることもいはずれ里の皆に知られるであろう。いくらこの場にいる者に口封じをしたところで、情報は漏れるものだ。十中八九、ばれるだろう。そうなれば里の皆に迫害を受けるのは明白だ。

「どうしたものか……」

途方に暮れる三代目であったが、四代目の遺したこの赤子を無下にする訳には行かない。

その赤ん坊は『うずまきナルト』と名づけられ、三代目預かりとなつて、木の葉隠れの里に迎えられた。

第一話「始まり」

九尾の木の葉襲撃から五年。一度は壊滅寸前にまで追い込まれた里も、老体を推して再び就任した三代目の、見事なまでの指導力と統率力により、ようやく復興の兆しが見え始めてきた。街にも活気が戻り、あと一年もすれば、以前の里と変わらぬ姿になるだろう。しかし、活気が戻ったといつても、人々の心の奥底にある闇は、決して消え去つた訳ではなかった。九尾への怒り、憎しみ。それらは、人々の心の中でもむしろ、日を追うごとに強くなっていた。そんな折、ある噂が、里の中で広まり始めた。

「九尾が子供に姿を変えてこの里の中にいる」

これがその内容である。当然、人々は殺氣立つた。自分の家族や友が死んだのに、何故あの狐が生きている？ そういう風の想いが日増しに強まり、里の中には、いつしか殺伐とした空気が流れようになっていた。

「はあ……どうしたものかのぉ」

火影執務室で三代目はひとりため息をついた。無論、恋煩いではない。里に流れている噂の事についてだ。

三代目は、噂の子供が誰であるのかを知っていた。そして、その子供が九尾が化けている訳ではない事も（実際は封印されているだけである）。

その子供の名前は『うずまきナルト』五年前、三代目が保護した少年である。この少年、ナルトは、とにかくよく笑う子だった。里

の復興に尽力し、疲れきったときでも、ナルトの無邪氣な笑顔を見るだけで気持ちが和み、やる気が沸いたものである。

最初の内は、やはり九尾が化けているのでは、などといろいろと危惧していたものだが、ナルトのそんな笑顔をみていると、この子供があの九尾だと到底思えなかつた。

だが、今の里人達に、それを伝えることは不可能だらう。完全に殺氣立つた今の状態では、ナルトに九尾が封印されていると知った時点で殺してしまいかねない。

「はあ……どうしたものか」

再び、三代目の吐息が、淀んだ部屋の空氣と交じり合つた。実際、これ以上ナルトに九尾が封印されているという事實を隠し通すのは無理だらう。むしろ、今まで隠し通せていた方が不思議なくらいだ。里人に伝えるのは論外、かといって、隠し通そうにもいづれ知られることになる。

ただでさえ重たかつた空氣が、より、重たくなつたように感じた。

「ため息ばかりついたと幸せが逃げますぞ、のぉ、三代目」

沈んだ三代目の心に、部屋の空氣を払拭するような陽気な声が響いた。下を向けていた顔を上げると、ドアに寄りかかるようにして、自らの良く知る男が立つていた。

「自来也か……アレは、持つてきたのか？」

「無論、そのためにわざわざ来たんですからのお」

急に神妙な面持ちになり話し掛ける三代目に対し、自来也と呼ばれた男も、同じく神妙な面持ちで答える。

「これに入つとります」

「ふむ、これか……」

懐から取り出した紙袋を、自来也は三代目へ手渡した。三代目はそれを受け取ると、慎重に袋を開け、中身を確認した。

「……これが……」

「そう、これが……これこそが、イチャイチャパラダイスの下巻、すなわちイチャパラの最終章！」

「むう、見事なり自来也。どれほどこれが待ち望んだ事か……」

そう、それは、恋愛初心者の主人公ヒロインが、次第に大人の愛に目覚めていく純情交際物語、イチャイチャパラダイス（下巻）であった……ちなみに十八禁である。

「……まあ「これは」これとして、自来也も、お主に頼みたい事がある」「ん、なんですかのお」

先程までの鼻の下を伸ばした表情とは打って変わつて、いきなりシリアスな表情を作る三代目と自来也。ただし、三代目はまだイヤパラを持ったままである。

「お主に、ナルトを預かつてもらいたい」

「……ナルトといつと、あの」

「そうじや。九尾を封印されておる子じや」

依然、シリアスな表情のまま話を続ける三代目……しつこじようだが、イヤパラは持ったままである。

「……何故、ワシなんですかのお」

「お世しかおらんのじや。今、里中が九尾を探し出やつと躍起になつてゐる。今までなんとか隠し通せたが、里の者も薄々勘付いてきとる。里の態勢も未だ万全ではない、あの子に掛ける時間がワシには無いのじや」

ト麿を噛みながら沈痛な表情を浮かべる三代田。その様子を見かねたのか、自来やは、溜め息を一つ吐き出すと、頭を搔きながら三代田に話し掛けた。

「ワシも大蛇丸の監視をしなきやならんし、危険が無いわけじゃない。それでも良いですかの、三代田」

「……残念なことじやが、今の里におるよつは安全じやねり。頼む、自来也」

「解つた。それじゃあ、ワシはもう里を出るんで、ナルトの居場所を教えて貰えませんかの？」

「あやつはワシの息子夫婦に預けとる。ワシの家におるよさすじや」

「それじやあ今から迎えに……」

「三代田、大変です！」

執務室のドアが勢い良く開き、かなり慌てた様子の忍びが入ってきた。

「何事じや、騒々し」

「つづまきナルトがいなくなつたそつです」

「なんじやとー」

三代田は机に手をついて荒々しく立ち上がった。自来也も軽く田を見張つている。

「息子様から連絡があつまして、少し田を離した隙に家から消えて

しまつていたそうで、恐らく街に行つたと思われます」

「いかん、今あやつが里人の前に出て、万が一のことがあればどうなるか解らん。詰所にある忍びにナルトを探して保護するように云えよ！ 大至急じゃ」

「は、はい」

三代目の命令を受け取つた忍びは、大慌てで執務室から飛び出していった。余りに慌てていたので、ドアを閉めていくのも忘れていたようである。

「自来也、すまんがお主も出でもらえんか？ 里の忍びを頼りにしどらん訳ではないのじゃが……」

「里人も忍びも同じ、という事か。それじゃ、ワシの被保護者を見つけに行くとしますかの」

やう言ひと、自来也はその場から姿を消した。

「へえ、やつぱり広ひつてばよ」

ナルトは、街を歩いていた。その日は、新しいオモチャを貰つたときのよにキラキラと輝いている。

この五年間、ナルトは一回も外に出た事が無かつた。里人にばれないようにするため、三代目がとつた処置なのだが、ナルトは元来好奇心旺盛な子供である。家もなかなか広くて楽しいのだが、やはり外の世界というのを見てみたいのだ。

「おじボウズ、お前見ない顔だな」

ナルトが大通りを歩いていると、突然、誰かに声をかけられた。声の飛んできた方を見ると、ラーメン屋があり、その暖簾の前に気の良さそうなおじさんがいた。

「ボウズ、どつから来たんだ？」

ナルトがちょこちよこと駆寄ると、おじさんが屈んで聞いて来た。

「えーっと、あつちだつてばよ」

「あつちつて……」

ナルト指を差す方を見ても、家がありすぎてどれなのか解りはない。

「ねえ、それよりオツチャン、ラーメンつて何？」

突然、ナルトが暖簾を指差しておじさんに聞いた。

「何つて、お前ラーメン知らねえのか」

「だからラーメンつて何だつてばよ」

ナルトは、ラーメンを知らなかつた。今まで家庭料理しか食べたことのないナルトには、ラーメンはまったく未知の物だつたのだ（家庭料理に普通ラーメンは出ない）。

「ラーメンを知らねえとは、ボウズ、お前人生の半分以上損してるぞ」

「え、嘘！ そんなに」

人生の半分といつても、ナルトはまだ五年しか生きてない訳であ

るが、その辺はノリである。

「よつしゃ、ボウズ、俺がラーメンを食わしてやる！」

「え、ホント！」

「応よ。ま、入れ」

おじさんに促されるままに、店の中に入るナルト。彼は知らない、この店が、天下に名を轟かせるラーメン一楽だということを。そして、彼に話し掛けたおじさんが、この店の主人、テウチだということを。

「……へイ、お待ち！ たんと食え、ボウズ」
「応！ いつただつきま～す！」

威勢の良い声と共に、良い香りのするラーメンが、椅子の上に立つたナルトの前に出された。ちなみに何故椅子の上に立つているのかといえば、単純に背が足りないからである。ズルズルと音を立てながら物凄い勢いでなくなつていくラーメン。台に汁が大量にこぼれたが、テウチは全く気にしなかつた。どうやらナルトの食いつぶりが気に入つたようである。

「ボウズ、良い食いつぶりじゃねえか。どうだ、美味いか？」
「ふわいっへはよ（美味いってばよ）ー」
「ガツハハハ、そつか、美味いか」

箸を持つた手を振り上げて声を上げるナルトと、豪快に笑うテウチ。どうやらいつち解けたようだ。

「ふう、全く、こんな所におつたとはのぉ。人の氣も知らんで」
「おや、自来也様、らつしゃい」

「おお、テウチ、久しぶりだのぉ」

ナルトがラーメンを食い終えて、テウチと談笑していると、男が一人入ってきた。無論、自来也である。たまたまこの前を通りかかつたら、元気の良い子供の声が聞こえてきたので、もしやと思つて入つてみたのである。

「ん？ オッチャンこの変なの知つてんの？」

「変なのとはまた、ひどい言われようだのぉ。まあ良い、テウチ、コイツ貰つていぐだ」

自来也はそのままつと、ナルトの服の襟をムンズと掴んだ。

「ええ、解りました。ボウズ、また来いよ」

「え、え？ お、おー？」

一人状況の掴めていないナルトは、テウチの言葉に何故か疑問系で返し、襟首を掴まれたまま、一楽を後にした。

「おお、自来也。見つかったか」
「ええ、一楽でラーメン食つとりました」
「なんと」

一楽で捕獲されたナルトは、そのまま火影執務室まで連れてこられた。未だ、襟首を掴まれたままである。

「あー、爺ちゃん、コイツなんなんだつてばよ」

ナルトが三代田に向かって、自来也を指差しながら言った。

「そやつはワシの弟子じや。それよりナルト、お主外の世界を見て
みんか？」

「え、外！」

外といつ言葉に反応して、ナルトの田が輝く。五年間家の中で過
ごしたナルトにとって、外は憧れなのだ。

「やうじや、そやつは外の世界を色々と旅して周つとるんでの、
お主も一緒に連れて行つてもらうことになつたのじや」

「ホントに、ホントに、くう、やつた～！」

既に自来也からは開放されていたナルトは、外に行けるとわかる
と、体全体を使って喜びを表現し始めた。その様子は、普通ならば
微笑ましく思えるだろうが、今の三代田には、ナルトが不憫でなら
ない。

「……ナルト、先に家に帰つて旅の支度をしておきなさい。そのつ
ちこやつが迎えに行くじやう」

「解つたつてばよ。んじや、爺ちゃんバイバイ」

三代目に促されたナルトは、飛び跳ねるのを止め、部屋から出て
行つた。

「ナルト、準備は出来たかのあ
「おー、こつでものくだつてばよ」

ナルトが準備完了してから遅れる事一十分、自来也が現れた。ナルトはそれに、元気良く片手を振り上げて応える。天気は快晴、旅の出発には最高の天氣だ。

「よし、それじゃあ行くとするかのぉ」

「おー！」

このとき、ナルトは気付かなかつた。自来也の手に、淡く光る眷物が握られていた事に。

この日、木の葉隠れの里から、凶悪な九尾の狐が、人知れずその姿を消した。里中に広まつっていた噂は、それから直に消えてなくなり、里は再び穏やかな空氣に包まれ、着々と復興していった。

第一話「狐の帰還」

木の葉隠れの里。忍び五大国の中でも、特に力の強い火の国に位置し、固い結束力と、幾多の優秀な忍びにより、その繁栄を誇った里である。だが、十年前、突如として襲来した九尾の妖狐により、里は滅亡の危機に瀕した。四代目火影と、数多の忍びの犠牲により、辛うじて九尾を封印する事に成功したものの、それで危機を完全に脱した訳ではなかつた。

木の葉の力が衰えたのを機に、他里は木の葉を潰そうと謀略を張り巡らせ、自国内では、木の葉を完全に取り込もうとする大名が策を練る。まさに四面楚歌の状況であった。だが、それすらも乗り越え、里を復興させたのは、三代目の働きによる所が大きいであろう。三代目火影。一代目火影の下で腕を磨き、プロフェッサーの異名と共に、他国にまでその名を轟かせる超一流の忍びである。また自らも、後に『三忍』と呼ばれることとなる三人の忍びを育て、木の葉忍軍のエースとして、里に貢献してきた。

火影就任後もその手腕は衰えず、その指導力と統率力で、里を一つに纏め上げてきた。そして、自らの後継者となりうる者、即ち四代目に火影の名を明渡すと、自らは隠居生活に入った。

だが、九尾襲来により、四代目が死去すると直に、上層部の要請を受け、火影に再び就任。長年培つてきた己の経験と手腕により、里の復興に尽力する。

と、このように、長年里のためにその身を捧げ、今では救国の英雄とまで言われている三代目だが、一つ気がかりな事があつた。『うずまきナルト』という少年のことである。この少年は、九尾を封印された少年で、腹に四象封印を重ね掛けした八卦の封印式が施されている。五年前、自らは政務で忙しく、弟子に預けて里外に、結

果的に厄介払いという形で追い出しあしまった子供である。

本来九尾を封印している英雄として見られるはずの子供を、追い出すような形になってしまい、里の復興を嬉しく思いながらも、心の片隅に、いつもその子供の事が引っかかっていた。もしかすれば、四代目の子供であるかもしれない、その子供のことが……。

「んー、なんか久しぶりの木の葉だつてばよ。五歳のときに出で以來だし、五年ぶり?」

「この日、木の葉の里に、凶悪な九尾の狐が再び、その姿を現した訳ではない。そこにいるのは金髪碧眼の少年。まだあどけなさの残る顔立ちをしているが、どこか人を惹き付ける雰囲気を醸し出している。

「爺ちゃん元気かなあ？　まさか寿命でポツクリなんて……ないよ、ね？　なんか心配になつてきたつてばよ」

里の入り口で、いきなり悲観的な考えを持ち出す少年。この少年こそは、里の人々とは接触する事すら許されず、さらに、覗きの常習犯であり、しかもそれを取材と言い張り、あまつさえ自分の書く小説（十八禁）のネタとして使用する重度の変態に預けられ、里を追い出されてしまった凶悪な九尾の化身、『つづまきナルト』である。

「早く爺ちゃんのトコに行ひつゝと。トコ仙人からの届け物もあるし」

しかし、この少年は、そんな悲壮感など微塵も感じさせず、顔に

は眩しいほどの笑顔を貼り付け、躍動感溢れる動きで歩き出した。ちなみにエロ仙人とは、前述の『重度の変態』のことである。あしからず。

「……おお、来たか、ハヤテ、アンコ、紅
「ハツ、で、どんな任務でしょうか？」

火影執務室、今、ここに三人の特別上忍が呼ばれていた。一人目は月光ハヤテ。剣術の使い手で、その実力はもはや上忍にも匹敵するが、病弱で、三分しか全力で戦えないと言う弱点を持っているため、未だに上忍に昇格できずにいるかわいそうな人である。二人目はみたらしアンコ。一芸に秀てる特別上忍の中で、特に戦闘に優れる人物であり、かつては禁術とオネエ言葉を好んで使うショタコンの変態に師事した事もある女性である。本人はその事を人生最大の汚点だと思っているらしい。三人目は夕日紅。木の葉にいる、数多くの一の中でも、屈指の色気を誇り、まさに、ザ・くの一といつた女性である。その実力の方も高く、特に幻術のスキルは抜きん出でている。

「つむ、お主らにはこの密書を火の国の大名に届けてもらいたい。途中、他国の忍びによる襲撃が予想されるが、お主らならやれるじやろう。頼んだぞ」

「ハツ」

三代目の言葉に、片膝を付いて返事をすると、目の前に出された密書をハヤテが持ち、三人はそのまま執務室を出て行つた。ところが、一分も建たないうちに、紅が戻ってきた。

「ん？ どうした紅、なにか質問か？」

いきなり戻ってきた紅に、首を傾げながらそう言つ三代目。が、紅は俯いていて応えない。様子が変だと思い、再度声をかけてみると、返事の代わりに、いきなり服をはだけさせ、胸が見えるか見えないかのギリギリで止めた。

「な、何をしとる紅！ 早く服を直さんか！」

あまりにも唐突な紅の行動に、動搖する三代目。だが紅は止める様子は無く、更にきわどいところまで服を持つていき、

「……三代目、私では……駄目……ですか？」

などと上田遣いでのたまつてくる。三代目はお持ち帰りしたい衝動に駆られるが、必死に我慢する。しかし、紅は止まる所を知らず、上田遣いのままにじり寄つてくる。これには流石の三代目も堪えきれなくなり、遂に理性のスイッチが切れようかといつときだった。

「……ギャハハハハ、引っかかつた引っかかつた。よ、爺ちゃん久しぶり」

ボンッと紅の周りに煙が立ち、その煙の中から一人の少年が出て来た。一瞬呆気に取られ、状況がつかめなかつた三代目であつたが、目の前の少年の顔を見ると、驚きとも喜びともつかぬような声をあげた。

「お、お主、ナルトか？」

「おつ、爺ちゃん久しぶり。それにしても良かつた、爺ちゃん死ん……と、何でもないってばよ。ア、アハハ」

「？ なんじや、可笑しな奴じやの！」

最後の方に不穏な言葉が入りそうになつたが、どうやら三代目には聞こえなかつたらしい。

「それにしてもナルト、さつきの変化の術。お主、一体どうやってここまで完璧に変化したのじや？」

「ん？ ああ、『写し身の術のこと？ あれつてば父ちゃんの巻物に書いてあつたんだってばよ』

「何！ 四代目の巻物じやと… いや、それ以前にお主、四代目が自分の父であると『つい』ことを…」

これは一重の驚きであった。四代目の術の中にあれほど完璧な変化の術があつたことも驚きであったが（生前の四代目が使つているのを見た事は無かつた）、それよりも、ナルトが四代目を自分の父だと認識している事の方が驚きであった。

「うん、知つてゐつてばよ」

「なんと…」

「何で驚いてるんだってば？ 爺ちゃん知つてたんじやなかつたの？」

「む、いや、薄々は勘付いておつたが… それよりナルト、お主それを一体どうやって知つたのじや？」

「ん？ ああ、なんか普通に巻物の最初に書いてあつたつてばよ」

「そつか…」

三代目は考えた。巻物に書いてあつたといふことは、四代目は初めからあの巻物を自分の息子、つまりナルトに渡すつもりだったといふことであり、それは四代目が、自分の死を予期していたという事になる。だが、あの時の九尾の来襲は確実にイレギュラーなもの

であつたはずだ。それを予期するなどできるはずが無い。だが、実際に四代目はそれをやつていたのかもしれない、いや、やつていたのだろう。でなければ、自分の術をわざわざ巻物にまとめたりなどしない。これが何を意味するのか、もかしたら四代目は九尾を……

「……ちゃん、爺ちゃん、どうしたんだってばよ」

「ん、お、おお、すまん。少し考え方をな」

ふと、ナルトの声が三代目の耳に飛び込んできた。それによつて、これまで考えていた事が一気に霧散する。そうだ、これ以上考えても埒があかない。結局、今までの考えは全て推測に過ぎないのだ。ピースが欠けているのにジグソーパズルを解く事など出来ないのだから、答えを出すのはまだ早すぎる。三代目は多少強引に、そう自分で思い込ませ、その思考を頭の中から消し去つた。

「やついえばナルト、自来也はどうした?」

「ひひ、三代目は、素朴な疑問を覚えた。ナルトは今まで、自来也と共に旅をしていたはずである。しかし、突然のナルトの登場やらなんやらで今まで気付かなかつたが、その自来也がいないのだ。

「エロ仙人なら大蛇丸を探りに行つてるつてばよ。なんか今回は大分深いところまで探りに行くとかで、俺にはまだ早いから木の葉に戻れつて言われたんだつてばよ」

「エ、エロ……いや、何でもない。そつか、大蛇丸を……」

そつ口にする三代目の心中は複雑である。大蛇丸、自来也と同じく、三代目が育てた伝説の三忍の内の一人である。忍びとしての才に優れ、言われずともなんでもこなす、まさに天才。少し心に闇を抱えてはいたものの、三代目としては自慢の教え子だった。だが、

その才ゆえに野望に取り付かれ、人体実験により禁術を開発、そして木の葉からその姿を消した。大蛇丸が何を考え、何をしようとしていたのか、それは本人にしか解らない。だが、三代目はその師として、命を賭して、不肖なる弟子の野望を潰すと、決心している。

「なあ爺ちゃん、俺つてばエロ仙人に忍者やれつて言われたんだけど」

「ん、ああ、それは構わんが、アカデミーからになるぞ」「全然OKだつてばよ。エロ仙人つてば体術とチャクラのコントロールしか教えてくんねーの。だから俺つてば初步的な術もできねーんだつてばよ」

「何、自来也の奴術を教えとらんのか？」

「そつだつてばよ。しかも体術のときには手加減なしで殴りかかってくるし、木登りは下に黄泉沼でしょ、水面歩行とか口寄せした蝦蟇背負わせるんだぜえ、お蔭で何度も死にかけたつてばよ」

「自来也、あの馬鹿弟子は子供相手に何をやつとるんじや……」

三代目は軽い頭痛がしてきた。まさか子供相手にそこまでするとは。確かに四代目にそういう修行をさせていたとは聞いた事があるが、まさかナルトにまでやるとは思わなかつた。

「ん、待てよ、お主さつき術を使つとらんかつたか？」

ふと、三代目はナルトの言葉の矛盾に気付く。そう、確かにナルトは術を使つていた。しかも見事なまでの完璧な変化の術だ。いや、写し身の術といったか。とにかく、ナルトは術を使つていたのだ。

「ああ、あれは例外だつてばよ。父ちゃんの巻物に書いてある術は勝手に覚えて良いんだつて」

「そうか。して、他には何があるのか？ 四代目の術は

「んー、あるにあるあるんだねうなびまだわからなこつてばよ
「わからない？」どういうことじや
「やじじじじじじ」

「なんかあの巻物つてば、俺のチャクラの量に比例して読める量が
多くなるみたいなんだつてばよ」

「ほう」

「だから最近今まで「少し身も使えなかつたんだつてばよ」

周到なことだ。やう、三世代田は思つた。やはりあの巻物はナルト
を成長させるために書かれたものらしい。とこりことねやはり、あ
の推測は正しいのだらうか？

「なあ爺ちゃん、俺つてばアカデミー行けるの？」

再び、ナルトの言葉によつて思考が中断される。それまで深く考
える事でもないので、三代田はそのまま思考を止めた。

「おお、やうじやな、直に手配せよ。入学の手続きが済んだら
連絡する、といひでナルト、お住むといひはあるのか？」
「ああ、それなら大丈夫だつてばよ。昔工口仙人が住んでた家があ
るらしいからそこに住むつてばよ」

「そりが、わかつた。でなこそて連絡させよう

「ん~、解つたつてばよ。あ、それと爺ちゃん、どうかに修行で使
つて良い場所ない？」

「修行？ それなら里の演習場のビビにでも構わんが、やうじやな、
アカデミーの演習場を使ってみんか？ あそこなら授業が終つた後
はほとんど誰もおりん箒じや」

「ん、そこで良つてばよ。じや、爺ちゃんまたな

ナルトはそう言つて残すと、走つて執務室から出て行つた。残され
たのは、三代田一人。

「ふう、四代目か…… 一体なにを考えとったのかの」

三代目の微かな咳きは、風と共に窓の外へ飛んでいった。

「爺ちゃんが言つてたのはこじだよな…… つと、誰かいるつてばよ」

火影執務室を後にしてから真、ナルトは三代目に言われた演習場に来ていた。実は場所がわからなかつたりしたのだが、道中親切な人がいて、なんとかここまでくることが出来たのだ。三代目は、誰もいない筈だと言つたが、実際は、そこには一人、修行をしている人物がいた。

「ハツ、ハツ、ハアツ」

場内の片隅にある丸太に、一心不乱に打ち込みをし続ける少女。ナルトは知らないが、その少女は、木の葉最強と謳われる日向家の長女『日向ヒナタ』であった。型から推測するに、柔拳だろう。丸太を人体に見立て、同じ箇所に何度も打ち込んでいるようだ、その場所だけ大きくへこんでいる。結構センスは良いな、ナルトはそう思つた。と同時に、まだチャクラのコントロールが出来ていないとも思う。

「おす！ お前がんばってんな～」
「え、キャツ！」

ナルトが近くに行つて声をかけると、人がいるとは思わなかつたのか、驚いて尻餅をついてしまつた。どうやら引っ込み思案タイプ

らしい。

「そんなに驚かなくても良いのに、ほら、手貸すつてばよ」

「え、え、あ、その……ありがと」

苦笑しつつ差し出されたナルトの手を、多少オドオドしながらとるヒナタ。その様子を見て、ナルトは不覚にも、可愛いと思つてしまつた。自来也のお蔭で風俗嬢のような色気には慣れていたが、こうした少女的な可愛さには慣れていないのだ。

「別に礼を言われることでもないつてばよ。あ、そういう、俺の名前はうすまきナルト、お前の名前は？」

「え、えつと、日向……ヒナタ……」

「よし、ヒナタな。でもヒナタつてば偉いな、こんな遅くまで一人で修行して」

「え、いや、それは違うよ。私は落ちこぼれだから、人より頑張らないと追いつけないから」

「落ちこぼれ～！ ヒナタが？ 冗談じやないつてばよ、ヒナタは絶対才能あるつてばよ」

拳を振り上げて熱弁するナルト。

「ええ！ そんなことないよ。私、弱いし、根暗だし、甘いし……」

「いーや、絶対センスあるつてばよ。さつきの打ち込みだつて、スピードも重さもなかなかのもんだつたし、後は柔拳に必要なチャクのコントロールを上達させればもっと良くなるつてばよ」

ナルトの讃辞に対し、謙遜なのか本心なのか、自分の悪い所を次々と挙げるヒナタ。だが、それをも両断し、尙も力説するナルト。

「え、何で柔拳だつてわかつたの？」

「そんなの簡単だつてばよ。柔拳は経絡系を攻撃する体術だから、それにはまず正確な突きを打てる事が絶対条件だつてばよ。で、ヒナタが打ち込みしてた丸太にはへこみがいつぱいあつた、てことは突きを何回も同じ場所に打ち込んでるつてことだつてばよ」

「そ、そんなのでわかつちやつたの？」

「へつへーん、当然だつてばよ」

尊敬するような眼差しで見つめてくるヒナタに威張つてみせるナルトだが、実際は自来也からの受け売りである。依然、柔拳の修行をしたときにそんな話をしていたのを覚えていたのだ。

「凄いんだね、うずまき君は私なんて……」

「ハイ、ストップ！ うずまき君なんてダメダメだつてばよ。ナルトで良いつてば」

「え、で、でも……」

「良いんだつてば、俺たちもう友達だろ？」

「え、と……じゃあ、その……ナルト君」

「ん~、ホントは君もいらないけど、まあそれで良いつてばよ」

頭を搔きながらそう語つナルト。苦笑しているようにも見えるが、実際はヒナタが可愛くて思わず見惚れてしまつたのが恥ずかしく、照れ隠しをしてついるだけである。

「え、つと、じゃ、じゃあナルト君、もう私帰るから、さよなら」

「ん、おうー、また会おうな」

「え……うんー！」

もう帰ると言い、足早に去つていいくヒナタに声をかけると、極上の笑顔を返された。今まで見た事もないようなその笑顔に、ナルト

は……完全に惚れてしまつた。

ナルトが木の葉に帰還して、一年の月日が経つた。それと同時に、凶悪な九尾の狐も、里に帰ってきたことになる。もしそれが知れてしまえば、間違いなく木の葉の里はパニックになつてしまつだらう。だが、里人はその事実を知らず、平穀無事な日々を送つてきた。無知とは良いものである。

この一年で、ナルトの生活で変わつた事がある。まず一つは、アカデミーに通うようになり、友達が出来たことだ。今までは、自来也と旅をしてきたため、同年代の友達など出来なかつたのだ……いや、正確には一人、ナルトにも友達がいた。だが、その親友はもう、この世にはいない。とある事件の際、死んでしまつたのだ。

まあ、そのことは取りあえず置いておく。ともかく、ナルトには友達が出来た。それによつてナルトも年相応の遊びをできるようになつた。

二つ目は、術の修行を始めたという事である。今まで、自来也に体術とチャクラコントロールしか習つてこなかつたナルトにとつて、これは非常に楽しいものだつた。だが、アカデミーで習う変化の術や変わり身の術、それに分身の術などは、チャクラのコントロールを殆ど完璧にこなしているナルトにとつては、難易度など皆無に等しく、一度見ただけで出来てしまつた（実際は、変化の術は覚える必要がないのだが）。これではつまらないため、今は四代目の巻物の新しく見れるようになつた術を修行中である。

そして三つ目、というか最後だが、『伴侶』といえる存在が出来たことだ。言わずもがな、日向ヒナタ嬢である。二年前、ナルトはヒナタに惚れてから猛烈なアタックを繰り返し、晴れて、『彼氏彼女』をすつ飛ばし、『結婚の約束』を取り付けたのだ。ちなみに、

某重度の変態の教育が、これには深く関与していると思われる。ちなみにその教育とは、街で美人な女性を見かけたら取りあえず声をかけるとか、風俗店を見かけたら脇目も振らず入っていくとか、覗きを取材と称し、しかもそれをネタにして小説（十八禁）を書くような教育である。まあ、そのお蔭というかなんというか、ともかく二人は未来の夫婦（？）になれたわけであり、今は所構わズストロベリッている。

とまあ、そんな感じでナルトはこの一年を過ごしてきたわけである。そして今日、遂に、忍者になる日が来た。

「次、うずまきナルト！」
「オッス！」

試験官に名前を呼ばれ、試験を行う教室へ向かうナルト。ちなみに今年の試験課題は分身の術、ナルトにとつては楽勝である。

「来たか。ナルト、わかつてるだろ？ が課題は分身の術だ」「わかつてるつてばよイルカ先生、んじやま」

ボンッと煙が立ち、出てきたのは教室に收まりきらないくらい大量のナルト。ざつと百人はいるのではないだろうか。狭苦しい教室に百人も分身を出したため、当然部屋はぎゅうぎゅう詰の状態になる。

「のわつ！ だあー、ナルト、わかつたから分身消せ、合格だ合格！」「え、マジ？ よつしゃあー！」

分身に押しつぶされ、息が出来なくなつたイルカが必死に叫ぶと、再び煙と共に分身が消え、両手を突き上げて喜ぶナルトだけが残つ

た。

「ほり、ナルト、額当てだ。今日からお前も一人の忍者だ、頑張れよ」

「おうー、当つたり前だつてばよ」

イルカから額当てを貰い、意気揚揚と教室から出て行くナルト。ちなみに某教師Mは、禁術を書いた書き物を手に入れようと行政府に忍び込んだところ、普通に暗部に捕まつて、あえなく御用となつた。

「ナルト君、おめでとうー！」

「ヒナタ！ ありがとうつてばよ。これからは一緒に下忍で頑張るつてばよ」

「うん！」

ナルトがアカデミーから出ると、いきなりヒナタが飛びついてきた。よろけながらもそれを受け止める、満面の笑みで応える。しかし、アカデミーの校門の前で抱き合つてている男女……どこからどう見てもヴァカツカッポオである。ちなみに周りからは、男共の殺氣の籠つた嫉妬の視線がナルトにむかつて惜しげもなく注がれているが、ナルトはそれを完全に黙殺している。

「おーおー、お熱いこつて。ていうか良くなヒナタお前等」

「ん？ シカマルか。良いじゃん、ヒナタつてば暖かくつて気持ち良いんだから」

校門前でナルトとヒナタがイチャついていると、誰かが声をかけてきた。黒髪を縛り、めんじくをそこにポケットに手を突つ込んでいる少年、奈良シカマルである。シカマルの冷やかすような言葉に

顔を赤くさせるヒナタだったが、ナルトは赤くさせるビーチが、平然としてさらりと惣氣をかます。周りの殺氣がさらりと高まつた。

「けつ、言つてる傍から惣氣かよ。ま、どうでも良いけどな
「へん、悔しかつたらシカマルも彼女作つてみろつてばよ」
「アホ言え。女なんてめんじくせーだけだぜ。じゃあな、俺は帰つて寝るわ」

「おう、またな」

シカマルは、ナルトと軽口を叩き合つた後、欠伸を噛み殺しながら帰つていつた。

「氣を、使わせちゃつたかな？」
「いや、あれはホントに眠かつただけだわ」
「クス、そうかもね」
「やうだつてばよ」

そう言つて、笑いあつ一人。また殺氣が濃度を増した。

「そうだ！ ヒナタ、この後暇？」
「うん、暇だけど」
「じゃあ一樂行かない？ 卒業祝いやるつてばよ」
「うん、行く」
「よーし！ それじゃあ一樂にGOだつてばよー。」

「うしてナルトとヒナタは、周りの嫉妬の視線も何のその、腕を組んで、ストロベリながら、ラーメン一樂へと向かつた。

「おっせえええ！」

「うるさいわよナルト！（でもホントに遅いー）」

下忍編成日当口、ナルト達は、壮絶な待ちぼうけを喰らっていた。下忍の班の編成は、一時間前には既に終っており、他の班はいずれも担当上忍が迎えに来て教室を出ていている。だが、ナルトの班の担当上忍だけは一向に姿を現す様子がない。

「なんでこんなに遅いんだってばよ、上忍が遅刻してて良いのか？」
部下に示しがつかないとか思わないのか？」

「ナルトうつさい！ 少しは黙んなさいよ」

担当上忍のあまりの遅さに愚痴を垂らしまくるナルト。そうとうストレスが溜まっているようだ。それに注意しているのは『春野サクラ』、編成でナルトと同じ班になつた女の子である。口ではナルトを注意するような事を言つているが、彼女も、内心担当上忍に対して、ヴァ殺すとか物騒な事を考へていたりする。そして、それを不機嫌そうな顔で見ているのが、もう一人の班員『うちはサスケ』である。彼もやはり、担当上忍の遅刻に腹を立てているようだ。それから十分経ち、三人の不機嫌が最高潮に達したとき、それはやつてきた。

「やー諸君、元氣してる？」

「――うざけんなあああああああ！」

三人の叫びは、歓楽街まで届いたそうな……。

「さてと、じゃあまづ『紹介からこつてみようか』

「自己紹介って、何言えばいいのよ」

「そりゃあ、好き嫌いとか、将来の夢とか、趣味とかそんなのだ」「ちょっと待って、その前に先生のこと教えてよ。見た目物凄く怪しいんですけど」

いきなり自己紹介しると言い出す担当上忍に対して、サクラが物凄い失礼な事を言つ。まあ、いきなり遅刻してきて、しかもマスクと額当てで素顔を殆ど隠してゐる人間を怪しいか怪しくないか聞かれたら、間違いなく怪しいと答えるだろうが。

「ん、俺か。オレは『はたけ 力カシ』って名前だ。好き嫌いをお前に教える気はない！ 将来の夢・・・って言われてもなあ・・・。ま、趣味は色々だ・・・・・・」

（（（結局わかったの名前だけじゃん）））

カカシの余りにもやる気のない自己紹介に、再び三人の心がシンクロする。いまならシャイン パークすら撃てそうである。

「ハイ、じゃあ次お前等な。ホレ、一番右から」

「俺？ 俺の名前は『うずまきナルト』、好きなものは一樂のラーメン、もっと好きなのはヒナタ。嫌いなものはイチャパラ。将来の夢はエロ仙人を越す！ 趣味は修行だつてばよ」

「ここでも思いつきり惚氣るナルト。しかも本人それを自覚していないのが尚性質が悪い。

その後、サスケが未熟な殺氣を振りまいたり、サクラが壊れかけたりしたものの、なんとか無事に自己紹介は終つた。

「よし、自己紹介はここまでだ。それじゃあ早速だが明日から任務やるぞ」

「任務つてどんなの？」

「まずはこの四人であることをやる」

「あること？」

「サバイバル演習だ」

「エッヘン」

突然、ナルトがどこからか魚の人形を取り出し、それに胸(?)を張らせた。鰐威張るという事だろ？

「……何で任務で演習やるんですか？ 演習ならアカデミーで散々やりました！」

サクラがこれでもかと言わんばかりの気迫で反論する。ナルトはスルーしたようだ。サスケもサクラに同意するような表情をする。こちらもナルトはスルーである。

「相手はこのオレだ、だからただの演習にはならんよ」

カカシの言葉を聞き、サスケとサクラは表情を引き締める。ちなみにナルトは……地面にのの字を書いていじけている。

「ま、楽しみにしてるよ」
「せめて内容だけ教えてくださいー。」

痺れを切らし、サクラが質問する。だが、カカシは人を小馬鹿にしたような態度を崩さず、ニヤニヤ笑いながら言つ。

「いや……あ！ ただな……。オレが言つたらお前ら絶対引くから」

その様子は、非常に楽しそうである。

「卒業生二十七名中、下忍と認められるのはわずか9名。残りの18名は再びアカデミーへ戻される。この演習は脱落率66%以上の超難関テストだ！」

ところが、一変して真面目になつたカカシの台詞に、サクラは顔を青くし、サスケも表情を険しくする。ナルトは……まだいじけていた。

「ハハハ、ホラ引いた……ってナルト、いい加減機嫌直せ」「わかつたつてばよ」

カカシにそう言われ、渋々立ち上がるナルト。そのナルトの様子に苦笑しつつ、カカシは最後に、

「じゃ、そういうことで明日は演習場でお前らの念遁を判断する。忍び道具一式持つて来い。それと朝飯は抜いて来い……吐くぞ！ ま、詳しい事はプリントに書いといたから、明日は遅れないよーに！」

そう言つと、カカシは三人にプリントを渡した。

「吐くつてー？ そんなにキツイのー？」

サクラの動揺は丸わかりだ。サスケも、今まで以上に表情を険しくしてプリントに目を通す。ナルトは……鶴を折っていた。

「うして、今日は昨日となり、明日が今日となつた。

第四話「サバイバル演習」

「やー諸君、おはよー!」

「「ふざけんなあ!」」

サバイバル演習当日、待受けさせ場所にやってきて、さわやかに挨拶する担当上忍を罵倒するその生徒。普通ならば態度不良ということで問題にもなりかねないが、これにはきちんとした訳があった。

「初っ端から遅刻してんじゃねーってばよ! しかも五時間、やる気あんのかー!」

そう。彼、はたけカカシは、班が決定してから最初の任務で遅刻してきたのだ。しかも五時間。大抵の人間なら許せないだろう。しかも昨日、朝食を抜いて来いといわれたお蔭で、三人は腹ペコだつたりする。

「いやあー、今田はちょっと田舎し時計が壊れててな!」

「嘘つけ! おもくそ正確に時間刻んでんじゃねーか!」

そう言つて、カカシは田舎し時計を取り出しが、ナルトの言葉通り、その時計は正確に時を刻んでいた。たった今、三人の頭の中に『殺』の一文字が浮かんだのは、仕方の無い事だらう。

「ま、細かい事は気にするな。それより演習だ演習、昼までに終らせるぞー!」

ナルトの非難を軽く流して、カカシはそう言つたが、ただいまの時刻十時五十分。昼まで後一時間も無い。ナルト達は、まだ何か言いたそうな視線をカカシに向けていたが、流石にこれ以上時間を延ばしたくないと思ったのか、大人しくカカシの説明を聴くことにした。

「さて、ここに一つの鈴がある。これを俺から昼までに奪い取る事が今回の試験の課題だ」

目覚し時計をセットして丸太の上に置きながら、カカシはそう言った。そして一つの鈴を三人に見せた。

「もし昼までに俺から鈴を奪えなかつた奴は昼飯抜き！あの丸太に縛り付けた上に、目の前で俺が弁当を食つから、そのつもりで」

カカシがそう言い終わると同時に、三人の腹の虫が鳴いた。それを愉快そうに眺めると、カカシは続きを言つ。

「まあ、鈴は一人一つ取れば良い。二つしかないから、必然的に一人は丸太行きになるという寸法だ。そんでもつて、鈴を取れなかつた奴は任務失敗という事で失格！つまり　この中で最低でも一人は、卒業した学校にもう一度通つてもらう事になるという訳だ」

その言葉に、サスケとサクラに緊張が走る。確実に誰か一人が落ちる試験、もしかしたら自分が落ちるかもしれないという可能性が心の中に残っていたアカデミー卒業という余韻を根こそぎ消し去り、サスケとサクラの表情が険しくなる。

ナルトはというと、この試験を疑り始めていた。自来也の下で修行してきたナルトは、かつて自来也相手に全く同じ事をした事があ

る。結果は惨敗。鈴を取るどころか、触れる事すら出来なかつた。確かに、目の前の上忍は自來也よりは弱いだろ。だが、今の自分からすれば、十分化け物の域に入る強さを持つてゐる。それが解つた故、下忍にもなつていないひよつ子が、目の前の人間から鈴を奪う事がどんなに困難かという事が解つたのだ。

「どうやらこの試験の内容は全員わかつてくれたようだな。や、話はこれくらいにして始めようか」

鈴を腰に付けて、カカシは更に言葉を紡ぎ、

「手裏剣でもなんでも使って來い。殺す氣でこないと一生取る事はできないからな」

さも当然通り前のよう言つてきた。

「使つても良いって、それじゃ先生が危ないわよ！」

それを聞いて、サクラが止めに入つた。手裏剣やクナイは、簡単に入を殺せる。アカデミーでも、何度も実習で使い、恐らく怪我もしてきたのだろう。

「ホントになんでも使って良いんだってば？　言つとくけど手加減は出来ねーってばよ？」

「ちよつとナルト！　アンタ何言つて「ああ、どんどん使って來い。殺す氣で構わん」先生も！」

「サクラちゃん、心配するだけ無駄だつてばよ。相手は上忍、俺らから見れば化け物の類に十分入るつてばよ。ハツキリ言つて力の差が開きすぎる。さつき手加減できねーとは言つたけど、しようと思つたつてできる相手じゃねーってばよ」

ナルトのその言葉を聞いて、三人の表情が変わった。ナルトの顔からは、既に普段の馬鹿っぽさは抜けている。カカシは、ナルトの評価を少し改めた。昨日のやり取りも会って、頭の方が弱い奴かと思つていたが、どうやらそうでも無いらしい。相手の力量をキチンと把握し、自分も態勢を整えた上で、さり気なに仲間にも注意を促している。下忍にしては、良い判断をする。カカシはそう思った。

「さて、これ以上話してたら時間が短くなる。それじゃあ、よーいスタートの合図で始める。いいな？」

そう言って、カカシは三人の顔を見渡した。もう少し会話を楽しんでいたい気もしたが、これ以上話していると本当に時間が無くなる。

「よしー、じゃ、始めるぞ。よーい　」

ナルトをはじめ、サスケもサクラも、構える。

「　スタート　」

カカシが言った瞬間、全員の姿がその場から消えた。

「忍びたる者　氣配を消し、隠れるべし」

そう呟く。別に、アカデミーを卒業したばかりの下忍候補がどこに隠れようと、直に見つけ出せるのだが、とりあえず忍びの基本に忠実なのは良い事だ。

「さてと、皆上手く隠れたな……って、ナルト、お前何してんの？」

誰から見てみようかと考えていると、自分の五メートルほど手前に、ナルトが姿を現した。思いもよらぬ行動に、カカシは思わず呆れてしまつ。先程評価を改めたが、撤回しようかとも思った。が、

「上忍相手にいくら隠れたつて無駄だつてばよ。なら、自分の得意な分野で精一杯やるほうがマシ、そう思わない？ 先生」

ナルトのその言葉で、やはり撤回するのを止めた。ナルトは自分が隠れても無駄な事を悟つてゐるのだ。だからといって、いきなり真正面から現れるのもどうかと思うが、少なくとも、油断はするべきではないと感じた。

「そうか。で、得意な分野つて何だ？」

「体術。俺つてば結構自信あるよ？」

「ほつ、そりや楽しみだな。それじゃ、忍戦術の心得その一。『体術』を教えてやろう」

そう言って、カカシはウエストポーチから何か取り出した。巻物ではないから、少なくとも忍術書では無さそうである。そして、カカシがその本の表紙を捲つたとき、ナルトはそれが何であるのかを知つた。

「あー！ それつてばイチャバラ！ 僕つてばその本大つ嫌いなんだつてばよ」

「そういう自己紹介の時もそんな事言つてたな……つて待て、なんでお前の歳でイチャバラ知つてんだ？」

カカシが驚くのも無理は無い。なぜなら、イチャバラは十八禁である。ナルトのような子供が知つてて良い本ではないのだ。もつと

も、五歳のときからそれに触れてきたナルトにとっては、ただの詰らない本というだけなのだが。

「そんなのどうでも良いつてばよ。それより、もしかしてそれ読みながら俺と闘る気？」

「どうでも良いつて……まあ良いか。ああ、お前くらいならこれ読みながらでも変わらんしな」

「ふーん、あつそ。後でほえ面かいても知らないってばよ」

瞬間、ナルトの姿が力カシの視界から消えた。イチャバラを読みながらも、視界の隅にはナルトの姿を入れていたのだが、突然消えてなくなり驚く力カシ。ハツと気がつくと、既に眼前にナルトの蹴りが迫っていた。

鋭い！

間一髪、ナルトの蹴りを避け、後ろへ跳ぶ力カシ。それを見逃さずに、ナルトは丁度十字の形で手裏剣を放ってきた。空中では身動きが取れない上に、手裏剣のスピードが速い。ナルトの、少なくとも体術や忍具の扱いのレベルは、既に下忍を超えていた。

「くつ、しょうがない」

このままで避けきれないと思った力カシは、既に持っているだけと化していたイチャバラをポーチに戻し、代わりにクナイを取り出して、手裏剣を全て叩き落した。地面に着地すると同時に、ナルトが肉薄してくる。しかし、これを予想していた力カシは、突き出されたナルトの腕を掴み、開いた手で首筋に手刀を入れた。

「ふう、なかなか良い線いつてたがこれで終わり……何！」

ナルトの身体から力が抜けたのを確認して、息をついたカカシだったが、次の瞬間には、まだ終っていない事を悟る。手刀をいれたナルトの体が、ボンッと音を立てて消えたのだ。

「影分身か……まったく、楽しませてくれる」

そう言って、カカシは低く笑つた。まったく、面白い奴だ。体術だけではなく、上忍レベルの忍術まで持ち出してきた。次は何を出してくるのか、カカシは楽しみでしうがなかつた。

試験開始から三十分、未だ、カカシが闘つたのはナルトだけである。ナルトと闘つたときから、サスケやサクラの気配は感じているが、一向に仕掛けてくる様子は無い。時刻は十一時三十分、そろそろ此方から仕掛けてみようかなあと、カカシが考えたときだつた。不意に、後方から手裏剣が跳んできた。全て突き刺さつたように見えたが、実際は変わり身で避わしている。

「おらああああ！」

「やあああああ！」

手裏剣が跳んできた方向から、サスケとサクラが突つ込んできた。馬鹿正直な特攻。サクラはまだしも、天才のうちはもこの程度かと、カカシが内心落胆したときだつた。サスケとサクラが急に一人づつに増え、これまた下忍にあるまじきスピードでカカシの四肢を封じたのだ。突然のことに、動搖するカカシ。それが命取りだつた。腰のところで、チャリンという音がした。

「あ

「へへー、これで三人とも合格だつてばよ、先生」

後ろを振り向くと、ナルト、サスケ、サクラの三人が、仲良く鈴を三人で手にしていた。

第五話「それぞれの戦い」

「「「な！ き、消えたーーー！」」

ナルト、サクラ、サスケの三人の叫びが、演習場内に木霊した。先程までそこにあつたカカシの姿は、今は影も形もなくなつてゐる。

「ちくしょー、やられたつてばよ」

ナルトが悔しそうに地団駄を踏んだ。サクラは依然として口をポカンと開けたまま突つ立つており、サスケは苦々しげに顔を顰めた。

さて、三人が何に驚いているのかというと、時間は少し遡る。

カカシの試験開始の合図と共に、ナルトは影分身を使い、それをカカシの所へ向かわせた。それも堂々と目の前に登場させる事で、意識をそちらに傾けさせるように。そして、影分身とカカシが交戦を始める。サスケとサクラに接触した。一人では絶対に取れないと確信していたため、二人と協力する事を選んだのだ。

「二人とも、頼むから俺に協力してくれつてばよ」

首尾良く一人と接触すると、ナルトは一人に言った。サクラの方は、多少戸惑うようなそぶりを見せたものの、とりあえず承諾してくれた。アカデミーでトップの成績を取つたのが効いているのだろう。だが、サスケの方は難色を示す。まあ、これは当然といえば当然だつた。アカデミー時代、サスケは、一度もナルトに勝つことが無かつた。体術でも忍術でも、常に自分の一步先をいくナルト。幼い頃の体験から、常に自分は一番でいなければならないと思い込んでいるサスケにとって、これは許容できる事ではなかつた。その

ためサスケは、事あるごとにナルトをライバル視し、敵として見てきたのだ。そんな相手に協力などしてやる気にはなれない。だが、ナルトは既に、サスケが難色を示すであろう事などは解っていた。そこでナルトは、対サスケ戦用の秘密兵器を繰り出す。

「ま、別に良いけどね。アカデミーの女子更　　「へ、仕方ねえな。やつてやろうじゃねえか！」　　物分りが良くて助かるつてばよ」

所詮はサスケも健全な一人の少年ということである。普段はクールぶつっていても、やる事はしつかりやつてたりするものだ。ということで、あつさりとサスケも作戦に組み込む事に成功したナルトは、二人に次のような指示を出した。

「俺が合図するまで決して俺の傍を離れず、合図をしたら、鈴を取りに行く」

「待てナルト、それのどこが作戦なんだ？」

「そりよ、全然具体的なところが解つてないじゃない」

当然、二人の口からは疑問の言葉が発せられる。それはそうだ。なにしろ具体的なことは全くわかつていないのである。

「別に解らなくても問題ないってばよ。二人はただ鈴を取る事に集中してくれれば良いから」

だが、ナルトは何も明かそうとはしない。サスケもサクラも、詰問しようとはするのだが、サクラの質問は、のらりくらりと全て避けられ、サスケは「女子更衣室」の一言で完全に無力化させられてしまっている。こうして、サスケとサクラは、結局大事な部分は何も知らされること無くナルトに協力させられる事となつた。

二人を協力させることに成功したナルトは、まず影分身を二つ作

り出した。そして、その一つの影分身を、[写し身の術でサスケとサクラに化けさせる。あとは、自分たちは隠れて、影分身に力カシを見張らせる。

そして今現在、ナルト達は力カシの鈴を奪取する事に成功した……かに見えた。が、

「いやー、まさかホントに獲られるとはねー。……でも、残念だつたな」

力カシはそう言って、愉快そうな笑みを残し、その姿を消してしまった。と同時に、三人の持っていた鈴も、消えてなくなっている。影分身を使っていたのだろう。ナルトたちは、まんまと騙されたわけだ。

そして、話は冒頭に戻る。

「チツ、時間の無駄だつたな。もう良い、俺は一人でやる。お前等は勝手にしろ」

サスケが、ふいにそう言って、その場を離れた。

「あ、待つてよサスケ君」

サクラもその跡を追う。

「おいサスケ、サクラちゃん。つたく、一人でいったつて取れやしねーつての」

そんな二人の後姿を見送りながら、ナルトは呆れたように呟いた。あの二人は、自分たちが一体どんな化け物を相手にしているのかを

全く理解していない。特にサスケだ。サスケは、自分を過大評価し、他人を過小評価、というか見下す傾向がある。恐らく、あの上忍に対しても、自分なら勝てるなどといった甘ちょろい自信を抱いているに違いない。

「はあ、サスケじや絶対えー無理だつてばよ」

ナルトは溜め息を吐く。先程の影分身。カカシはある時、自身だけでなく鈴まで分身させていた。物質の影分身。自分の師匠である自来也がやつて見せた事があるが、曰く相当難易度の高い技らしい。非凡なチャクラコントロールと、長年に渡る修練が必要な術だとも聞いた。そして、あの上忍はそれをやつてのけた。相手は、自分の思っていた以上に化け物なのかもしれない。ナルトは、己の体が震えているのを感じた。それが、歓喜なのか恐怖なのか、それは誰にもわからない。

「こんな所に居やがつたか」

カカシは、最初の丸太の置いてある場所にいた。丸太に腰掛け、イチヤパラを読み耽つている。言わすもがな、教育者にあるまじき姿だ。

「サスケか、もう協力するのは終わりか?」

「ふん、あいつ等じや足手まといにしかならない。俺一人で十分だ」

カカシの、半ば挑発するような口調に、サスケは自身満々に答えた。カカシは、サスケの言葉に苦笑すると、

「さて、それはどうかな。とりあえず、期待のホープ『うちはサスケ』の実力を見せて貰おうか」

薄く笑いながらそう言った。

「へッ、あとで吠え面かくんじやねえぞ！」

言つや否や、サスケは力カシに向かつて、地を這うように疾駆していく。腰を低くした体勢のまま、手裏剣やクナイを投擲する。

「バカ正直に攻撃したって、俺には当らないよ」

丸太から立ち上がった力カシは、イチャパラから目を離すことなく、足のばねだけでそれらを近く避けていく。最後の一つを避け終わるとほぼ同時、サスケの足が、力カシの側頭部を強襲した。が、力カシは開いている方の手でそれをガードする。防がれたサスケの方は、大して残念がる様子も無く、そのまま空中で一回転し、墜落としを繰り出してきた。それを力カシはバックステップで避けるが、瞬時に間を詰めてきたサスケが、更に拳と蹴りの乱舞を繰り出す。

チツ、なんて奴らだ。こいつといいナルトといい、イチャパラを読む暇が無い

流石に、下忍離れしたサスケの体術の猛攻に、力カシもイチャバラを読む余裕など無い。全くもつて、今年は面白いのが入ってきた。そう、力カシは思った。

サスケの猛攻は尚も続く。上への蹴りが止められれば下への蹴り、拳をいなされれば肘鉄。自分の知つていて、ありとあらゆる種類の攻撃を繰り出していくサスケ。途中、フェイントを入れて距離をとり、至近距離からクナイを投擲した。しかも、ご丁寧に時間差でも

う一本投げている。弾くわけにもいかず、無理に身体を曲げてそれを避わしたカカシの目に映つたのは、馴れた手つきで印を組んでいくサスケの姿だった。

「火遁・豪火球の術！」

「な、何イ！？（バカな、その術は下忍じやまだチャクラ量が足りないはず）」

サスケの口から、凄まじい炎の球が放たれる。火球は、地面を抉りつつカカシに向かっていく。普通なら、ここでカカシは消し墨になつているところだろう。だが、そこにカカシの姿は無かつた。

（いねえ！ 後ろか！？ いや、上か！？ クソッ！？ 何処行きやがった！？）

「下だ」

「なつ！？」

上を見上げているサスケに、突如下から声が掛かる。そして、そこから手が伸び、サスケの足首を掴んだ。

「土遁・心中斬首の術」

「うわああああ！」

サスケは、地面に思いつきり引きずりこまれ、首から上だけ残して地面に埋められてしまった。

「忍……戦術の心得その二！ 忍術だ……。にしてもお前は、やっぱ早くも頭角を現してきたか」

カカシは、サスケの前にしゃがみ込むと、そう言ってニコッと笑

つた。サスケは不服なようで、不満そうにカカシを睨んだ。

（サスケ君……ビートルのかな……）

サスケが力カシに埋められ終えた頃、サクラは身を低くし、サスケを探して森を進んでいた。あの後、サスケの後を追つたのは良いのだが、サスケの移動スピードに付いて行けず、見失つてしまつたのだ。

（まさか、もう先生に……イヤ！ サスケ君に限つて、そんな事ないわよ！ だつてサスケ君は天才なのよ！？）

嫌な考えが浮かんできたのを、頭を振つて振り払う。

ガサツ

（サスケ君！？ いや、もしかして先生！？）

慌てて身を隠し、茂みの向こうに意識を集中させる。そこには、イチャパラを読んでいるカカシの姿があつた。

（危なかつたわ……あと少しで声をかけるといつた……）

まだ自分の存在がばれていない事に安堵したサクラだったが、ふいに、背後から声を掛けられた。

「サクラ、後ろ」

「え！？」

その言葉を聞いた瞬間、サクラが条件反射で振り返ると、カカシが突然現れ、その目の前で木の葉が舞っていた。それを見たサクラは、ボーッとしてしまったが、木の葉が急に舞い上がった直後、ハツとなり、自分の状態を確かめた。

「…え!? エ!? 今の何…? どうなつてんの…? 先生はどうこ…?」

多少パニックに陥りながら辺りを見渡すが、そこにカカシの姿はない。

「……サクラ……」

そのとき、木の陰からサスケの声がした。振り向くとそこには、

「サスケ君…?」

「サ…サク…ラあ…た、助けて…くれ…え…」

振り向いたサクラの目の前には、片腕が既に無く、片足があらぬ方向に曲がっており、体中にクナイや手裏剣が突き刺して血を大量に出しているサスケがいた。それを見たサクラは目に涙を浮かべて大声で絶叫した。

「あ、あぎやああああああ…!」

サクラが氣絶したのを確認して、カカシは呟いた。

「……ちよつとじぱつかしやりすぐたか…」

あぎや ああああああああ

風に乗り、その叫び声はサスケの下にまで聞こえた。

「今の声は……（サクラのか……）」

恐らくサクラはリタイヤだろう。だが自分も地面に埋められてしまっている。人の事を笑える身分じゃなかつた。

そしてその声は、当然ナルトの耳にも届く。

「今のはサクラちゃんか？」

小さく盛り。そして、

「先生、何したんだってばよ」

自分の背後に立つ力カシに聞いた。

「忍戦術の心得その三、幻術。サクラの奴、簡単に引っ掛けちゃつてね

「幻術か……まあ、良いつてばよ。それより、一回戦始めてみる?」

力カシの返答をどうでも良さそうに流し、ナルトは、腰を低くして構えた。その声には、戦意が満ち溢れている。

「一回戦か、よし、来い！」

「行くつてばよ！」

そしてナルトは、カカシに向かつて駆け出した

第六話「チームワーク」

（……何て奴だ。体術だけなら既に中忍以上、しかもアカデミーを卒業したばかりだというのにチャクラのコントロールまでしつかりしている。これは子供一人で到達できるレベルじゃないぞ）

ナルトの連撃を捌きながら、カカシは、その実力に改めて感嘆した。正拳、裏拳、肘撃ちに掌底、それに上、中、下段の蹴り。それらを上手く組み合わせながら、時折忍具での攻撃も絡めて攻めてくる。しかも、その全てが重く速い。それに、

（こいつめ、さっきは本気じゃなかつたな）

そう、先程交戦した時よりも、明らかに強くなっているのだ。最初に戦つたときには、せいぜい中忍の中の下位の実力だったが、今は中忍でも最高レベルの実力はあるだろう。体術だけなら、ヘタをすれば上忍すら齎かすほどだ。カカシは素直にそう思つた。

だが、カカシは里一番と謳われ、他国にまでその名を轟かせるほどの忍びである。おまけに、いつも勝負を挑んでくる体術のスペシャリストのライバルのお蔭もあり、体術の捌き方は熟知している。いくらナルトが強いとは言つても、まだまだカカシの敵ではなかつた。

「クソッ、こんなんじや埒が開かないってばよ」

自分の攻撃が少しも当らないのに苛立ちを感じたのか、ナルトは、最後に一つ前蹴りを繰り出すと、その反動で後ろへと跳びずさつた。勿論力カシはこれを掌で防いだが、予想外に威力が高かつたため、

二、三歩後退してしまう。その間に、ナルトは印を組み始めていた。手馴れた様子で、次々と印を組んでいく。

（子・戌・辰・亥・酉……何だあれは？　あんな印の並びは見たことが無いぞ）

先程も言つた通り、カカシは他里にまでその名を轟かせる一流の忍びである。それも、ある特殊な能力により『千の術をコピーした男』と言われているのである。そのカカシが知らない術を、まだ下忍にすらなつていないう子供が使おうとしているのだ。事の尋常の無さが窺える。

「……戌・寅、寅の印！　火遁か！？」

体内的チャクラを炎に変え、それ行使する火遁系の術は、大抵が寅の印により発動する。ナルトは、寅の印を最後に、大きく息を吸い込んだ。つまり、ナルトは火遁系の忍術を使おうとしている。カカシがそう考えたのは、ある意味当然のことだつた。しかし、もしカカシが、ナルトがどこぞのエロ仙人から受けた修行の内容を知つていれば、また別の結論に至つたかもしれない。だが、時既に遅かつた。

「火遁……」

ナルトのこの一言で、カカシの注意は、完全にナルトが使おうとしている術にいつてしまつた。まさに、それこそがナルトの狙いであることも知らずに。

「もうつたつてばよ！」

「何ー？」

瞬間、カカシの足元から、ナルトが一人現れ、カカシの動きを封じ込めた。普段ならば、避けるなり蹴り飛ばすなり出来たはずだったが、カカシの注意は全てナルトの術のほうにいつていたため、完全に裏をかかれた形となり、反応が遅れてしまったのである。

「まさか隠れ身の術とはな」

「へへ、基本的な術つて結構盲点になりやすいんだってばよ。特に、レベルが上の方の忍びになればなるほど、ね」

揶揄するように笑うナルトに、カカシは些か憮然とした表情になつたが、直にそれを打ち消した。そして、その表情を引き締める。

「なるほど、確かにその通りだ。今後気をつけよう」

明らかに、カカシが発する雰囲気が変わった。今までの、どこかふざけた感じのそれは完全に消滅し、代わりに、幾多の視線を潛り抜けてきた本物の忍びの発する気が、辺りに立ち込めていく。

「悪かつたな、ナルト。どうやら俺はお前を舐めすぎていたらしい。これからは……」

「……！」

カカシの纏う何かに、危険なものを感じ取ったナルトは、すぐさまその場から飛び退いた。その半瞬後、今までナルトがいた場所の地面から、四本の手が這い出てきた。そして、その本体の方も地面から這い出てくる。カカシの影分身だ。カカシ本人の方に目をやると、既にカカシの動きを封じていたはずのナルトの影分身は消えており、腰を低くして構えたカカシの姿が見えるだけであった。

その言葉がナルトの耳に届く前に、既に力カシはその背後を取つていた。軽く舌打ちしながら、後ろに向かつて蹴りを繰り出すナルト。だがそれは、軽く身を捌いただけで簡単に避けられ、逆にその足を取られて投げられる。

空中に高々と放り投げられたナルトは、どうにか体勢を立て直して、反撃に移ろうとクナイを取り出すが、それが力カシに向かう事は適わなかつた。眼前に迫る四枚の手裏剣。空中では避けることも出来ないため、ナルトは手に持つたクナイでそれらを叩き落す。

だが、力カシを前にしてその行動は致命的だつた。手裏剣を全て叩き落したナルトの眼に映るのは、既に印を組み終えた力カシ。

「火遁・豪火球の術！」

サスケが放つたものよりも一回りは大きい火球が、ナルトへ向かって猛進する。未だ空中にいて身動きが取れないナルトは、咄嗟に影分身を作り出し、自分を地上へ投げさせた。地面に激突するかに思われたナルトだったが、空中で巧みに姿勢を変えると、チャクラを足へと集めて落下の衝撃に耐える。

どうにか難を逃れたのも束の間、ナルトの頸に力カシのつまさきが突き刺さつた。その余りの威力に吹き飛ぶナルトだったが、地面を五、六メートル滑つた辺りで、飛び跳ねるようにして起き上がる。そこへ襲い掛かる二撃目。風を切り裂きながら迫る拳を、ナルトは辛うじて避けた。そして、そのまま腕を取つて捻りつつ、一本背負いの要領で投げる。

力カシの身体を地面に叩きつける寸前、「ゴキリ」という鈍い音がしたかと思うと、ナルトは物凄い衝撃によつて吹き飛んでいた。突然の衝撃に反応しきれず、近くにあつた大木にしたかに身体を打ち付け、流石のナルトも息が詰まる。その目に映つたのは、片腕をだ

らんとぶら下げる力カシだつた。その姿を見て、先程の衝撃の正体を知る。力カシは投げられる寸前、自ら間接をはずし、そのままナルトに攻撃したのだ。

感心しつつ、木を支えにして立ち上がるナルトの視界に、一つの銀の影が映つた。先程の力カシの影分身だ。そう認識した時には、既に両脇を固められ、身動きを取れなくされてしまつて、そのままナ

「終わりだ」

腹部に突き刺さつた力カシの拳により、ナルトの意識は断ち切られた。

腹部に残る鈍痛により、ナルトは目を覚ました。目の前には、サクラと地面に埋まつたサスケ、それに力カシがいた。腕のほうはすっかり元通りになつてゐるようだ。何故かサクラが涙目なのは、ナルトが目を覚ます前に、サクラが地面に埋まつてゐるサスケを見て再び氣絶すると言つハプニングがあつたからだが、それはとりあえず置いておこう。

「お、ナルト。起きたか」

「うーん、俺つてばどの位寝てた?」

「十分そこらだ。ま、気にするな」

陽気にそう言つた力カシは、一転して表情を変え、真面目な様子になる。

「さて、今日の演習でわかつたことがある。おまえら全員アカデミ

「に帰る必要はないよ」

「それで合格つて」とですかー?」

真っ先にサクラが反応した。サスケも、無関心を装つてはいるが、口の端にかすかに笑みを浮かべている。一人の間に、安堵の空気が流れた。が、

「ああ、お前ら全員、忍者をやめろ」

次の一句で、その場の空気は凍結した。余りに唐突で残酷なその言葉に、サスケとサクラは混乱する。だが、意外にもナルトは冷静だつた。まるで、そのカカシの言葉を解つていたかのような感じだ。

「ど、ど、ど、う、こ、う、事、?」 忍者をやめろって……そりや鈴は取れなかつたけど……」

未だ混乱してこるサクラが当惑気味に聞いた。

「どいつもこいつも忍者になる資格のねえガキだつて事だよ」

それに対するカカシの言葉は冷たい。サクラはますます意味がわからないという表情になり、サスケは頭に来て飛びかかるうとしたが、地面に埋まっていたため動けなかつたため、忌々しげに舌打ちをした。

「お前ら、忍者なめてんのか、あ!? 何の為に班ごとのチームに分けて演習やつてると思つてる?」

「え? ど、ど、う、こ、う、事、?」

「つまり……お前らは、この試験の答えをまるで理解していない……」

…

カカシはそこで言葉を切ると、三人の顔を見渡した。そして、ナルトが妙な表情をしているのに、ijiではじめて気付く。

「ん？ ナルト、どうした
「チームワーク」

その言葉に、カカシは小さく反応した。そして愉快そうに笑う。

「そうか、お前は解ってたようだな」

「うん、チームワーク。それがこの試験の答えだつてばよ」

サスケとサクラは、弾かれたようにナルトを見た。なんでコイツが？ といった表情である。まあ、それも仕方が無い事だろう。ナルトは、アカデミーでの座学のテストはビリだったのだから。当然、頭が良いなどとは露ほども思われてはいない。

「そう、正解だ。3人で来れば鈴も取れたかもな」

「つて、ちょっと待つて……何で鈴2つしか無いのにチームワークなワケえ！？ 3人で必死に鈴取つたとして1人我慢しなきゃならないなんて、チームワークどころか仲間割れよ！」

「だからこそチームワークなんだってばよ。任務とかで報酬が人数分出ない場合はどうするんだつてば？ サクラちゃんはいきなり仲間割れでもする？ そんなことしないでしょ？」

答えに納得がいかないのか、カカシに噛み付いていくサクラに、ナルトが冷静に諭した。それがまた驚きだったのか、サスケとサクラは意外そうな顔をする。

「…………そうだ。コレはワザと仲間割れするよう仕組んだ試験だ」

一呼吸置いて、カカシは続ける。

「今ナルトが言つたように、このように仕組まれた試験内容の状況下でも尚、自分の利害損得に関係なく、チームワークを優先できる者を選抜するのが目的だつた。それなのにお前らと来たら……。サクラ、お前は何処にいるのかも分からぬサスケの事ばかり。ナルト、お前は最初は答えに気づいて二人と協力したからそこは評価しよう。だが、サスケを助けようと思えば助けられたのに、そうしなかつたのはいただけない」

そして最後。

「サスケ！ お前は他人を邪険し個人プレイで突っ走る。確かに忍者にとつて卓越した個人技能は必要だ。だがな、任務は班で行う。だから実力云々よりも重要視されるのはチームワークだ。チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に陥れ、殺す事になる。例えば……」

そこでカカシは一旦言葉を切り、ポーチからクナイを取り出してサスケの首に突きつけた。

「サクラ、ナルトを殺せ！ さもないとサスケが死ぬぞ」「え！？」
「と、こうなる」

驚くサクラに対し、カカシは音も無く立ち上がる。

「人質を取られた拳銃、無理な2択を迫られ殺される。任務は命懸けのものばかりだ」

その言葉を、三人は真剣な顔をして聞いていた。いや、正確に言えば、ナルトの表情にはもっと複雑なものが浮かんでいる。悔恨、郷愁、慚愧。それらが絹交ぜになつた、なんとも複雑な表情だ。だが、それも一瞬の事。力カシ達が目にする前に、それは消えてなくなる。

「世の中には普通じゃない特殊な一族だつている。そいつらの場合殺されたほうが幸せな苦痛が待つていてるかも知れない」

力カシは、厳しい表情でサスケを横目で見つつ言った。サスケは顔を青ざめさせ、苦い表情をする。

「コレを見ろ。コレは全て里で英雄と呼ばれている忍者達だ……」

弁当の置いてあつた石碑の前まで行き、力カシはそつと言った。

「……ただの英雄じゃない。任務中に殉職した英雄達だ……」

サスケとサクラの表情が一変する。そしてナルトも、顔も知らない父の事を思い浮かべた。

「これは慰靈碑。この中には俺の親友の名も刻まれていてる……お前ら、最後にもう一度チャンスをやる。ただし、昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ！ 挑戦したい奴だけ弁当を食え。あと、サスケには食べさせるなよ。」

「え？ ちよ、ちよつと何でよ？」

サスケに弁当を食べさせるなと言つた力カシに対し、何故かサクラが抗議の声をあげる。サスケは、黙つて力カシを睨みつけるだけ

だ。

「とにかく、良いな。お前達、もしサスケに食わせたりしたら食わせた奴を、その時点で試験失格とする。此処では俺がルールだ。分かつたな」

力カシはそんな一人に取り合はず、少し強めに言い残して、その場から姿を消した。その場に少しの間、沈黙が降りる。

「……とりあえず、サクラちゃん、サスケを掘りおこすつばよ」「え、ああ、うん」

そして、ナルトとサクラは、サスケを掘り起こし始めた。

「……悪かつたな」「え?」

「なに、気にはすんなりばよ。これもチームワークってやつだし」

掘り出されてから、暫くは無言で手足の状態を確かめていたサスケが、唐突に一言呟いた。その顔は、微妙に赤い。それにしても、素直にありがとうと言わない辺り、サスケらしいと、ナルトは苦笑しながら思つた。

「さて、弁当食つか。サスケ、そんな所でぶすつとしてないで、こつち来て一緒に食おうぜ」

「ちょっとナルト、何言つてるのよ。サスケ君に食べさせたらアンタも失格なのよ、わかってるの?」

いきなり、サスケに弁当を食おうと言つ出したナルトに対し、サクラが声を荒げた。サスケも、驚愕の面持ちでナルトを凝視している。

る。

「だから、『食わせる』んじゃなくてサスケが自分で『食つ』んだつてばよ。それなら何の問題も無し、オールオッケーだつてばよ」

そんな二人に対し、自身満々に言い放つナルト。どうやら屁理屈で切り抜けるつもりのようだ。

「そんな言葉遊びじゃ言い訳にならないわよ」

「じゃあ、サクラちゃんはサスケが食えまくつてぶつ倒れても良いの？」

「そ、それは……いや、だけど」

「なら問題ないつてばよ。ほらサスケ、早くこっち来いよ」

そう言つて、どこからとも無く割り箸を取り出すナルト。いきなり手の中に割り箸が現れる様は、なかなかに不気味だ。流石にぎよつとするサスケだったが、直に、しぶしぶと言つた様子で けれど足取りは軽く ナルト達の下へ向かつた。

一つの弁当を三人でつつき、約十分ほどで食べ終えた。三人とも、どうにか腹の虫をなだめる事が出来たので、今は午後からの打ち合わせをしている。その時だつた。急に辺りの空気が変わり、凄まじいまでの怒氣が溢れ返つた。そして、

「お前、りあああー。」

ひつらも凄まじい表情で、カカシが突つ込んできた。瞬身の上に、煙に爆音。大した凝りつぶりである。

「きやあ
「チツ」

それに対し、三者三様の反応を見せるナルト達。サクラは驚いて腰を抜かし、サスケは咄嗟に臨戦体制をとる。そしてナルトは……。

「……ブツ」

吹いていた。どうやら首筋で脈打っている頸動脈が壺に入つたらしい。体を小刻みにフルブルと震わせている。

「……ゴホン。ゴーかつく」

そんなナルトの様子に気付いたのか、カカシは一つ咳払いをすると、気を取り直したように三人に合格を言い渡した。

「え？ 『』、合格！？ 何で！？」

理解が追いついていない様子のサクラに、カカシは穏やかな声で説明する。

「お前らが初めてだ。今までの奴らは『素直に俺の言つ事をきくだけ』のボンクラどもばかりだったからな。忍者は裏の裏を読むべし……忍者の世界でルールや捷を破る奴はクズ呼ばわりされる。……けどな！ 仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ」

カカシのその言葉を聞き、ナルトの表情が曇る。先程のよつな、色々な感情が複雑に絡み合つた表情だ。だが、それもまた、一瞬で消えた。

「これにて演習終わり！全員合格！よお～しい！第7班は明日より任務開始だあ！」

親指を立ててそう言うカカシに、サスケとサクラの表情が緩む。そしてナルトの表情も、幾分晴れやかなものに変わっていた。

今、私の膝の上で安らかな寝息を立てる、まだあどけなさの残る少年『うずまきナルト』。私の最愛の人だ。金色の髪に、整った顔立ち。今は閉じてしまっている目が開けば、その、澄み切った碧の瞳に、私は魅せられてしまうだろう。

彼は、どこまでも強く、優しく、そして自分自身に厳しい。まるで、自分自身を戒めるかのようにして、彼は過酷な修行を自分自身に課している。

人前では、常に笑顔という名の仮面を被っている彼だが、私は知っている。その仮面の裏に隠された、彼の痛みを、苦しみを、そして……哀しみを。

彼は、私に本当の顔を見てくれた。その事は嬉しく思う。けど、その理由は、まだ教えてはくれない。恐らく、彼の師である自来也様は知っている。でも、私は知らない……少し、嫉妬。

でも、私から彼に何があつたのかを聞く事はしない。たぶん、聞けば教えてくれるとは思うけど、しない。したくない。彼自身が、私に話してくれる気になる時まで、私は待とう。そして、一日でも早くその日が来るよう、私は自分を磨く。

彼の、本当に信頼できるパートナーになるために。

自己紹介が遅れました。私の名前は『日向ヒナタ』。血継限界『白眼』をその血に宿す、日向一族宗家の娘にして、彼、『うずまきナルト』の妻。それが私だ。……未来の、だけど。

私が彼に初めて出会ったのは、アカデミーの演習場だった。正直、あまり家が好きではなかつた私は、授業が終つた後も、残つて修行をしていたのだ。

内容は、突きの打ち込み。

柔拳、特に私達日向の使うそれは、その性質上、突きが重要な役割を担つてくる。だから私は、その修行を日課として自分に課していた。

一体何回打ち込んだときだつただろうか。陽気な声とともに、一人の少年が姿を現した。この里では珍しい、金色の髪と碧の瞳。その顔には、眩しいくらいの笑顔が張り付いている。

名を『うずまきナルト』といつその少年は、いきなり、私のことを讃め始めた。

自分の技を人から讃めてもらつたのは、久しぶりだつた。初対面の人と、こんなにも多くの言葉を交わしたのは、初めてだつた。

私はなんとなく恥ずかしくなり、気付いたときには、その場から駆け出していた。

途中、後ろから聞こえてきた言葉に返事を返したときの私は、一体どんな顔をしていただろうか。彼は教えてくれない。でも、きつとそんなに悪い顔じゃなかつたと思う。

だつてその時の私は、少し心の靄が晴れたような、そんな気分だつたから。

それから、私達はよく会うようになつていて。彼は、いつもあの場所で修行しているようで、私も一緒に修行させてつもらつたりしている。

そのときに気付いた事が三つ。

一つは、彼が物凄く強い事。まだアカデミー生でしかない私から見ても、彼は凄く強い。無駄の無い、それでいて躍動感溢れる身のこなし。一つ一つの技のキレ。それに、術はまだそんなに使えないみたいだけれど、チャクラコントロールには非凡なものがある。

私も、柔拳使いとして、チャクラコントロールにはそれなりに自身を持つてはいるけど、彼のはそんなレベルじゃない。体内に眠るチャクラを瞬時に練り上げ、そこから必要な分だけを切り出し、残つたものはそのまま留めておく。普通は、チャクラを練り上げればそれを全部使い切つてしまふのだけど、彼にはそれができる。まだ、父上や上忍の人達レベルには届かないだろうけど、それでも、彼は恐ろしく強かった。

もう一つ。それは、彼が何かとてつもなく深い哀しみを抱えているという事だ。

彼が時折見せる儂げな表情。触れれば壊れてしまいそうで、でも、触れてあげなければ孤独で押しつぶされてしまいそうな、そんな表情。彼は何を抱えているのか、私にはわからないけど、きっと、とてもなく大きなものなのだと思う。

そして最後。そんな彼を、無償に愛おしいを思つてている自分がいるという事。

いつの頃からだつただろうか、彼の姿を目で追いかけるようになつたのは。

いつの頃からだつただろうか、彼の事ばかり考えるようになつたのは。

いつの頃からだつただろうか、自分が少し好きになつたのは。いつの頃からだつただろうか、彼がいないと物足りなくなるようになつたのは。

自問を繰り返し、ようやく気付いた。私は、初めから彼が好きだつたのではないか、と。

だから、彼が私を好きだと言つてくれたあの瞬間。私は、泣き出していた。周囲も気にせず、ただただ歓喜の涙を流しつづけた。

その時のオロオロしている彼が、ちょっと可愛かったのは、秘密。

私は、彼を愛している。彼のいない世界なんて考えられないほどに。

彼の笑顔を見れば、私の心は癒され、彼の哀しげな顔を見れば、私の心は引き裂かれそうになる。

あなたがいるから、私は笑顔になれる。

あなたがいるから、私は涙を流せる。

あなたがいるから、私はここまで強くなれた。

それでも、まだまだ足りない。彼の背負っているものを一緒に背負うには、私はまだ弱すぎる。それが無償に悲しく、寂しく、そして、苛立たしい。

私はもっと強くなろう。心も、身体も。いつか、あなたの背負つてるものを、私も共に背負えるように。何年、何十年経つて、二人が年老いた時。

最愛のあなたの隣りで、優しく微笑んでいてあげることができるよつに……。

第七話「波の国へ……」

「なあナルト。大事な人を裏切るつていうのは、どんな気持ちなんだろうな」

目の前に立つ少年が放つた第一声は、そんな言葉だった。さらさらの銀髪に、印象的な翡翠色の瞳。その顔を見た瞬間、ナルトの表情が強張る。

愕然。その言葉が、今のナルトの表情を表すにはピッタリだろう。

「そいつからを信頼されて、半身のように思われている存在を裏切るつて、どうこう気持ちはなんだろうな」

(やめろ)

更に質問を重ねるその少年に、ナルトは反射的にそいつ言つてしまつた。その少年のことは知つていて。自分の、一番の親友……だった。

「なあ、どうこう気持ちはなんだろうな。教えてくれよ、ナルト」

(やめろ)

またも反射的にそいつ答えるナルト。だが、その少年は質問を止めよとはしない。

「そんなこと言わずに、教えてくれよ。俺には判らないんだからさあ

(やめろ)

次第に、ナルトの口調は弱くなつていぐ。まるで、何かに怯えるかのようだ。

「俺は裏切られた側だから判らないんだ。そういう気持ちが（やめろ）

少年の口の端が、少しだけ吊りあがる。嘲り、そして恨みの籠つた笑みだ。

「お前なら判るだろ、ナルト。なにせお前は……」

少年の口の端が、よつ一層吊りあがつた。その表情に、悔穢を込めて。

「俺を裏切つたんだからな」

（やめろ）

「…………夢、か」

寝覚め最悪

ナルトは自嘲氣味に笑みを洩らした。体中から汗が噴出し、寝間着が肌にベッタリと張り付いている。時刻は、まだ卯の刻を回つた辺りだ。

「気持ち悪い……」

そう呟いた言葉は、寝間着に對してか、それともあの夢に對してか。自分でも判らないが、ナルトは取りあえずシャワーを浴びる事

に決めた。

今日は午後から人に会つ。間違つても、あいつにこんな顔見せられないな。湧き上がる嘔吐感を抑えつつ、ナルトは浴室のドアに手を掛けた。

「悪いヒナタ。遅れたつてばよ」

「ううん、そんなに待つてないし」

昼過ぎになり、ナルトは、里全体が見渡せる丘の上に来ていた。そしてそこには、既に日向ヒナタの姿もある。

そう、今日はヒナタと会う予定だったのだ。偶々、二人とも任務の無い日が重なつたので、久々にデートでもしようかと約束していただのである。

デートといつても、この二人がする事といえば、ナルトがヒナタに膝枕をしてもらつたり、他愛も無い話をしたりしてのんびりするだけである。

「空、青いな」

「うん、青いね」

そして今も、ナルトはヒナタに膝枕をされ、空を見上げている。ヒナタは、そんなナルトに微笑しつつ、その金色の髪を撫でていた。まるで、母と子のようである。

「ヒナタ」
「うん？」
「好きだ」
「……うん。私も」

ナルトが、下から見上げるような形で呟いた。一瞬、戸惑ったような表情を浮かべたヒナタだったが、直に微笑を取り戻し、ナルトの呟きに答える。全く、どこからどう見てもバカップルだ。

ナルトはヒナタがいると、心が落ち着き、ヒナタもナルトがいれば、穏やかな気持ちになる。お互いがお互いを必要とし、尊重する相手を縛り付ける事は絶対にしない。一人とも自由の身であり、それでいて自ら望んで傍にいる。

そうは言つても、婚約という言葉で互いを縛つているじゃないかと思う人もいるかもしない。しかし、あの婚約は、ヒアシの顔を立ててした事だ。二人は、別に結婚する事に拘つてはいない。別に結婚をしなくても一緒にいる事はできるのだし、それだったら別に結婚をしなくても良いと、一人は思つている。要するに、互いがいればなんでも良いのだ。

「好きだ」

「うん」

再度、ナルトは呟く。まるで、そこにヒナタがいるという事実を確認するようだ。

「ヒナタは、俺を受け止めてくれるよな？」

弱々しい、問い合わせた。明らかに何かに怯えている、そんな感じだ。

「うん。勿論だよ」

「こんな俺でも、良いんだよな？」

「当たり前だよ。あなたは、私の最愛の人なんだから」

ヒナタが優しく笑いかけるのを見たナルトは、一瞬、その瞳を揺らめさせた。恐怖と羨望の入り混じった眼差し。一体何が、ナルトの眼に映つたのだろうか？ 少なくとも、ナルトの反応を見る限り、余り歓迎できる類のものではない。恐らく、親友の面影であろう。愛する人であるはずのヒナタに、そんな思いを重ねてしまった事に對してか、自嘲気味な表情を浮かべていたナルトだったが、何かに気付いたようにその表情を打ち消した。

「……ありがとう」

そして、今度は驚くほど柔らかな表情でそう呟くと、そのまま静かに寝息を立て始めた。朝、余りにも早い時間に起きてしまったがために、どうやら寝不足だつたようである。

そんなナルトに、慈しむような眼を向けていたヒナタは、ふつと口元を綻ばせ、ナルトの額に口を近づけ、

「どういたしまして」

軽く口付けを落とした。

早く、あなたが解き放たれますように

と、願いを込めて。

次の日、ナルトは木の葉任務請負所に来ていた。用件は任務終了の報告と、任務内容の迷子猫を依頼主に返すことだった……のだが、「ああ！ 私のかわいいトラちゃん……死ぬほど心配したのよオ！」

「ギニヤーーー！」

思わず退いてしまった。隣りにいるサクラやサスケ、カカシも同様だ。本当に返して良かつたのかとすら思つ。それほど、目の前の光景は壮絶なのだ。

衣服のあちこちに豪華な装飾品を使つていて、身分の高そうなご婦人。この人が、今回の依頼者であり、あの猫の御主人様である。『トライ』は、その御主人様の抱擁に涙を流してぐつたりとしていた。口や目も半開きで、どう見たつて憔悴しきつてている。

「……返して良かつたのかしら？」

「いや、まあ……」これも忍の任務だよ

些かげんなりとした様子のサクラに、カカシはそう言つた。が、内心彼も同じ思いである事は明白であろう。

ナルトが、写し身の術で猫に変化して探したので、捕獲 자체は大して難しくは無かったものの、猫とご主人の感動の対面ではなく一方的な頬ずりで終わりを飾つて良いのだろうかと七班の全員が思つていた。

「さて、今日はもう帰るか」

いい加減見飽きたのか、カカシが疲れた様子でそう口にした。よほど精神的にキていたのだろう、上忍が言うべきではない言葉を平然として呟いている。

「気持ちはわからんでもないが、カカシよ、そういうことはワシに聞こえんように言わんか」

「あ、あははは、どうもスマセン」

だが、その場には火影もいたのだ。うつかりそれを失念してしまつていたカカシは、慌てて愛想笑いを振り撒いた。

「ふう、まあ良い。それより次の任務じゃが……老中様の子守りに、隣町までのお使い、芋掘りの手伝いか……」

「ふざけんな！ そんなのノーサンキューだつてばよ！」

溜め息を吐いて、次の任務を説明し出した三代目には、突如ナルトが噛み付いた。敬意も何も無いその言葉遣いを、カカシが呆れたようにならせる。

「こらナルト、三代目に向かつてなんて口の利き方をしてるんだ」

「えー、だつて爺ちゃんは爺ちゃんだし」

「だつてもそつても無い」

にべも無く言い放つカカシに、何を思ったのか、ナルトは意地の悪い笑みを見せた。

「へえ、良いのカカシ先生？ 昔カカシ先生がリンッていう女の人のきが「ま、まあ、俺も少し声を荒げすぎたな。許せナルト。な、な？」……わかれば良いんだつてばよ」

自分の生徒に齧られる教師……憐れ。

「あ、ついでに言えば爺ちゃんも若い頃、コハルとかいう人の風呂をのぞ「わかった！ カカシ、お主らにはCランク任務を請け負つてもらひ」……人間素直が一番だつてばよ」

ついでに、下忍に従うしかない火影……憐れ過ぎる。ちなみに、ナルトの情報源は、某エロ仙人である。

「どんな内容なんだ？」

力カシと三代目を、冷ややかな目で見ていたサスケが聞いた。こちらも尊敬の念は欠片も無い。まあ、先程のやり取りを見ていれば無理も無いが。……微かに同情するような表情を浮かべているのは、恐らく自分も同じ目に遭つたからであろう。

「ある人物の護衛じゃ。なに、心配せんでも良い。Jランク程度でちょっかいをかけてくるのはせいぜい街のチスピラ位じゃ」

少し顔色の悪くなつたサクラを見て、三代目は安心させるようと言つ。

「護衛対象は波の国で橋作りをしているタズナという人でな。今、当人が木の葉の里を訪れておるので、タズナさんを守つて波の国まで赴き、橋の完成までしつかり護衛するのが任務じゃ」

「ふーん、で、その依頼人は？」

ナルトは少しだけ、残念そうな表情を見せた。他国の忍と戦いたかつたのであるう。そんなナルトの様子に、三代目は少しだけ苦笑を見せたが、直に真面目な表情になると、依頼人待合室に向かつて声をかけた。

「もうそこで待機してもらつとる。タズナさん、入つてきてもらえますかな？」

三代目の言葉の後、戸が開き、酒瓶を持ち、眼鏡をかけて捻り鉢巻きをした初老の男性が入つて來た。

「なんだあ？ 超ガキばっかじやねーかよ」

仮にも依頼する立場の人間が、酒瓶に口を持つて行き、ぐいっと煽る。余りにも態度が悪い。

「……特に、その一番ちっこい超アホ面。お前それ本当に忍者かあ！？ お前え！」

「口の利き方には気を付けた方が良いってばよ？ ジゃないと早死にするから」

その場にいた全員が息を呑んだ。先程までは力カシ達の下にいた筈なのに、一瞬にしてタズナの後ろに回り、クナイを突きつけるのだ。

サスケやサクラは、単純に依頼人に歯を向ける事に対して驚いていたが、三代目やカカシは違う。今のナルトの瞬身のスピード。カカシや三代目ですら、なんとか目で追えるレベルだったのだ。カカシは思わず冷や汗をかく。

あいつ、まだ実力隠してたな

戦つても負けはしないだろうが、間違いなく苦戦はする。それが、今のカカシのナルトに対する感想だった。

「こらナルト、依頼人を脅してどうする、全く……」

とはいえ、放つておくわけにもいかないので、カカシはナルトの頭を軽く小突くと、タズナに向かつて頭を下げる。

「すみませんタズナさん。少々やんちゃなヤツでして」

「……いや、ワシも悪かった。護衛の方、よろしく頼む」

ナルトの脅しが効いたのか、頭を下げるカカシに対して、タズナも頭を下げる返した。

こうして、平穏とは言えないまでも、無事に依頼人との挨拶を済ませたナルト達は、一路、波の国へと向かうのであった。

第八話「カカシの想い、火影の想い」

「ねえ、カカシ先生……波の国にも忍者つているの？」

里を出て約一時間ほど歩いた頃、サクラがカカシにそう尋ねた。その表情は少々冴えない。恐らく、他国の忍者と戦う事になりはないかと心配したのだろう。

「いや、波の国に忍者はいない。が、大抵の国には、文化や風習の違いこそあれ、隠れ里は存在し、忍者もいる」

そんなサクラの様子を見て取ったのか、カカシは安心させるように穏やかな声で言った。その際、サスケとナルトが僅かに残念そうな表情をしたので、カカシは思わず苦笑しそうになる。

「大陸にある沢山の国々にとつて忍の里の存在は国の軍事力に当たる。つまりそれで隣接する他国との関係を保つてはいるわけだ。かと言つて里は国の支配下にあるもんじゃなくて、あくまで立場は対等だけどな。それぞれの忍の里の中でも特に、木ノ葉・霧・雲・砂・岩の五ヶ国は国土も大きく力も絶大な為、『忍び五大国』と呼ばれている。それで里の長が『影』の名を語れるのも、この五ヶ国だけでな、その火影・水影・雷影・風影・土影のいわゆる『五影』は全世界、各国何万の忍者の頂点に君臨する忍者達だ」

少々抗議つぽくなつたが、サクラの不安は大分薄れたようで、その表情にも余裕が出てきた。

「へー火影様つてすごいんだあ！（あのヨボヨボなお爺さんがそんなにスゴイのかなあ……。なんかウソ臭いわね！）」

ついでに、自分の里の長に対して失礼な事を考える余裕も出でくる。

「……お前ら、今火影様を疑つたる？」

その言葉に、サクラと……何故かサスケの身体が一瞬跳ね上がった。サスケもどうやら失礼なことを考えていたらしい。

「ふう、全く。まあ良い、波の国には忍者はいないから、取りあえず安心しとけ。何かのトラブルでもない限り、Cランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ」

「ホントですか！ ああ、良かつた！」

「……」

サクラの安堵の言葉と、カカシの言葉にタズナが僅かながら反応した。無論、カカシはそれに気付いていたが、敢えて何も言わずに歩を進める。出発の前、三代目から告げられた事を気にしながら。

「はたけ力カシ、入ります」

「うむ」

扉を開け、一礼してから、カカシは火影執務室へと入った。内心、何を言われるのかとヒヤヒヤしていたが、表情には出さない。

依頼人との挨拶を済ませた後、カカシは三代目に執務室に来るよう言っていた。里外任務となるので、色々準備をしておきたかつ

たのだが、火影の言つ事を聞かないわけにもいかない。といつ」とで、カカシはこの場所にやつてきていたのだ。

「カカシよ、本題に入る前にお主に伝えておく事がある
「伝えておく事?」

思わずカカシが胡乱気に聞き返す。歳が歳だけに、遺言かもしないと思つても、それは仕方の無い事だ。

「うむ。お主、九尾来襲の際、どのようにしてそれを退けたか……
知つてあるか?」

「いえ、ただ四代目が命を犠牲にして奴を打ち倒したとしか……」

言いながら、カカシの顔が苦々しげに歪む。それも当然のこと。
四代目火影は、彼の師匠なのだ。

「確かに、里の者にはそう伝えてある。しかし、それは真実ではない。あの時、四代目は、九尾を己の命と引き換えにして、一人の幼子に封印したのじゃ」

「封印ですつて! それじゃあ、九尾は……」

「うむ、その幼子の中で生きてある」

カカシは、呆然とその場に立ち尽くした。あの九尾が、まだ生きているというのだ。もしかすれば、再びあの惨劇が起こるかもしれない。その可能性があるという事実だけで、カカシは襲い掛かって来る不安と恐怖を振り払う事が出来なかつた。

「……それで、その子供といつのは今どい?」

カカシは、なるべく己の同様が表に出ないよつ三三代目に問い合わせ

けた。

九尾を封じられたということは、即ちその子供は人柱力となつたということだ。人柱力は、その体内に封印された尾獸の力を使う事ができるため、総じて、里の内部で化け物扱いにされる。だが、今までこの里ではそういう事は起こっていない。それどころか、里の者は皆家族という概念通り、平穏そのものの暮らしを送っている。ならば、その子供は一体どうしたのか？ 導き出される可能性は、三つほどある。

一つは、既に抹殺したという可能性だが、これはまず無いといって良い。人柱力を殺した場合、その中に封印されている尾獸は、実体として現れるはずだ。そうなれば、疲弊しきつたこの里など、もはやこの世界に存在してはいないだろう。

となると、残る可能性は一つだ。

そのうちの一つは、里のどこかに隔離され、幽閉されている可能性だ。だが、これも可能性としては低いだろう。何故なら、その情報ならず、噂までもを一度も耳にした事がないからだ。隠しているから当然と思うかも知れないが。そうではない。情報というものは、得てして漏れるものなのである。それも、その重要度が高ければ高いほど、漏れやすくなる。確かに、何年か前にそのような類の噂が流れた事があったが、それも直に消えていったのだ。この線もほぼ消えたといって構わないだろう。

そうなると、残る可能性は後一つ。里外へ既に追放されたという可能性だ。力カシとしては、これが一番有力だと思っている。人柱力がいくら強力とはいっても、相手はまだ子供。暗部を監視に付けて置けばまず間違いは起こらない。それに、里外のことならいくら何でも噂となつて流れ入つて来ることは無いだろうし、これが一番安全な策だと思える。

「その子なら、今この里にある。それも、立派な一人の忍びとしてな」

「なんですか？」

カカシは、驚愕の声をあげた。それもその筈、自分の予想はあつさりはずれ、その子は今この里におり、あまつむえ忍びをやつているのだといつ。これで驚くなと言つ方が無茶な相談である。

「一体誰なのです、三代田一？」

「うむ、その子の名は『うずまきナルト』。今お主が受けもつとる下忍第七班の一員じや」

「そんな……ナルトが……」

カカシは、一の句を告げることが出来なかつた。まさか自分の教え子の中に、あの九尾を封じた人柱力がいよつとは。カカシの心中で、どす黒い感情の渦が巻き起こりかかる。

「カカシよ、馬鹿な事を考へるでないぞ」

その時、三代田の声が、その渦の中へと入り込んできた。

「確かに、あの子には九尾が封印されておる。じゃが、それでもあの子は一人の人間、『うずまきナルト』なのじや。それが解からぬお前ではあるまい」

その言葉の一つ一つが、カカシの心の中の濁流を、清流へと変えしていく。

「それに……あの子は、四代田の息子じや」

「な！……う、でしたか」

悲痛な面持ちで語る三代田の言葉に、カカシは、危く自分がとん

でもない間違いを起こしかけていた事に気付いた。

そう、たとえ人柱力とはいって、ナルトは一人の人間なのだ。そのことは、短いながらも一緒に任務をこなしてきた自分が一番良く解かっている筈ではないか。明るく、お調子者だが、時折驚くほど冷静になり、正確な判断を下すあの少年。確かに少し変わっているが、その行動には人間味が溢れている。そのどこに、あの凶悪な九尾の面影を見ようといふのか。

それにナルトは、あの四代目の中子だというではないか。考えてみれば、確か尼僧としか考えられない。尾獸を封印する者は、大抵赤子に限られる。ということは、九尾を封印したときも、その対象は赤子であつたはずだ。だが、あの四代目が、他人の子に封印するわけがない。とすれば、必然的に自分の子に封印するしかなくなるのだ。それに、九尾の襲来は十二年前、ナルトの歳は十二歳。おまけに、誕生日は九尾来襲の日と同日と来ている。もはや、疑う余地はなかつた。

「本当、なのですね」
「うむ。四代目が遺した巻物にも、そのことは明記されとつたそうじゃ」

一応、確認の意味も込めて聞いてみたが、やはり真実らしい。力カシは、三代目が口にした、四代目が遺した巻物というのにも興味を覚えたが、あえて聞くのは避けた。変わりに口から出てきたのは、別の問いだ。

「では、ナルトのあの強さはやはり九尾の……」
「いや、ナルトは九尾の力を使ってはおらん。あやつが強いのは、ワシが自来也に預けたからじゃ。どういうわけか、忍術は全く教えとらんようだが、チャクラコントロールと体術だけは叩き込んだようじやからのお」

「自来也様に…… そうでしたか」

それなら納得できる。と、カカシは胸の内で呟いた。自来也といえば、伝説の『三忍』の一人としてその名を轟かす、超一流の忍である。その力は五影に匹敵するとも言われ、中には、その名を聞いただけで逃げ出す忍者すらいるほどである。

そんな、忍者の中の忍者のような人物に預けられていたのだ。強くならない訳がない。しかも、体術とチャクラコントロールのみを教えられてきたのだという。その結果が、ナルトのあの実力に現れているわけだ。

「カカシよ、あの子を見守つてやつてくれ」

三代目の言葉には、真剣な響きがあつた。

「ナルトは人柱力じや。今は里人に知られておらんとはいえ、いつかは知れてしまつじやろつ。その時に、傍であやつを守つてやる存在が必要なのじや」

カカシは、三代目の話を黙つて聞いている。

「本来ならば、ワシが直接あやつを守つてやりたい所なのじやが、残念な事にワシももう歳じや。この先何年生きられるかも解からん。だからこそ、カカシ、お主に頼んでききたいのじや」

暫しの沈黙が流れる。その間、カカシはずつと、目を閉じて何かを考え込んでいるように見えた。

「……三代目、私は、あいつを守つてやりたいと、そう思います。四代目の子であるというのも、理由の一つではありますが、それ以

前に、あいつは私の教え子です。私は、私の教え子に、あいつらに、少しでも大きな背中を見せてやりたいと思つています」

かつて、先生が見せてくれたように

心の中でそう付け加えて、カカシは、三代目にナルトを守る意志があることを伝えた。ただし、それは何もナルトに限つたことではなく、彼の教え子全てに共通するものである事も、同時にほのめかす。

「すまぬな。じゃがやはり、お主に任せても良かつたと、ワシは思つとるよ」
「いえ」

カカシの返答に満足したのか、三代目はフッと表情を緩めた。

「さて、この話はここまでじゃ。あんまりしんみりしてもいかんしのよ」

だが、それも束の間。今度は一変、厳しい表情に変わる。

「三代目からが本題じゃ。カカシ、今回お主達に請け負つてもうう任務だが、どうやら裏がありそうだな」

「裏……と、言いますと?」

「つむ。任務ランクの虚偽の疑いがあつての、今特別上忍に命じて調べをさせておる」

三代目は、淡々とした口調で叫びた。カカシは、その言葉を暫く吟味した後、言葉を選ぶように問い掛けた。

「それは、最悪の場合になる可能性もあるという事でしょうか？」
「いや、まだそこまではわからぬが……可能性としては、頭に入れておいてくれ」

「解かりました」

何かわかれば連絡させると、三代目の言葉を聞き終わったカカリシは、一礼をして、執務室を後にした。

それにしても、今回の任務は一筋縄ではないらしい。下手をすれば忍同士の戦闘もあるだろ？。果たして、下忍になつたばかりのチームで完遂できるのか……。班の構成員は、協調性はないが、天賦の才で急激に力をつけてきているサスケ。班員の中では最も非凡力だが、頭の回転の速さは随一のサクラ。そしてナルト。……案外いけるかもしね。苦笑を洩らしながら、カカリシは自宅への道を歩いていった。

ちなみに、周りから見れば相当の変人であったという事だけは、ここに明記しておく。

この反応を見る限り、悪い予想は当たりそうだな

タズナの反応を見て、カカリシはそう確信した。やはり、この依頼人は自分たちに何か隠し事をしている。前方に見える不自然な水溜りも、それを証明していた。

（他国の忍びか……。大した事は無さそうだな。これなら……）

サスケやナルトに任せられる。そう思つて、ふとナルトの方を見たカカリシは、そこについた光景に僅かに目を見開いた。

ナルトは、自分のポーチにさり気なく手を突っ込んでおり、カカリ

シを見て一ヤリと笑つたのだ。

(気付いているのか？　いや、それよりあの笑い……)

嫌な予感がする。その力カシの考えは、ほんの数十秒後に現実となる事になる。無論、そんな事には、力カシ以外この場の誰もが気付いてはいなかつたが。

第九話「偽りの依頼」

起爆札。それは、一見するとただの紙切れだが、実際には術式が書き込まれており、チャクラを込めると爆発するといつ、忍具のひとつである。威力は高く、質の悪い忍術などよりもよほど使えるので、忍者たちの間では重宝されるが、少々値が張るため、安易に使えないと言うのがネックである。

なぜいきなりこんなことを説明しているのか？ 答えは簡単、今、ナルトが手に持っているからである。

「（起爆札！ あの馬鹿）伏せろおー！」

カカシは短くそう告げると、タズナを押し倒し、その勢いで自分も前方へと倒れ込んだ。サクラとサスケは、訳がわからないと言う顔をしたものの、田代の訓練の成果か、しつかり前方に身を投げ出している。そんな中、唯一人立っているナルトは、足元の水溜りに向かって手にした札を落とした。

轟音

それは、数瞬の後に、地を搖るがす衝撃と共にやってきた。地面は窪み、既にそこについた水溜りは跡形もない。あまりの衝撃のため、サクラとサスケは数メートルほど吹き飛ばされている。

「ふむ、ちょっと威力が強すぎたかな？」

などと、呑気なことをのたましながら、空から降りてきたのはナ

ルトである。どうやらあの爆発から、吐嗟に上に跳ぶ事で逃れたらしい。なぜか、その表情は清々しい。

「おい、ナルト！ 手前H、一体何のつもりだ！」

爆風によつて吹き飛ばされたサスケが、ナルトに怒鳴りつけてきた。まあ、いきなり訳もわからず、近くで起爆札を使われたのだから、この反応も当然だろう。服の背中のほうが少し焦げているが、それ以外には大した外傷も見当たらない。サクラも似たようなものであるし、タズナはカカシがしつかり保護していたので、無事だ。どうやら大した被害は出でていよいよである。

「あー、悪いってばよ。範囲限定の起爆札だったはずなのに、失敗作だつたみたいだ」

「ふざけんな、その失敗作で殺されかけたんだぞ！ 大体なんで起爆札を使う必要がある！」

「別にふざけちゃいなってばよ。丁度良い実験相手がいたから使つただけで」

鼻息も荒く突っかかつてくるサスケを軽く否すナルト。その目は、サスケではなくではなく、別のものを捕らえている。

「実験相手？ そんのがどこに……」

言いながらナルトの目線を追つたサスケは、言葉をそれ以上続けることが出来なかつた。なぜならそこには、ボロボロになつた忍装束を申し訳程度に身につけ、裂傷や火傷を無数に負つた一人の忍びが立つっていたからだ。

「あれか？ 実験相手つてのは」

サスケがそう聞くと、ナルトは軽く頷いた。その目には、微かに警戒の色が浮かんでいる。

「へえ、今のを避けるのかあ。もしかして、結構やる?」

「小僧……貴様、タダでは済ません!」

感心したようにそう語つナルトに、忍の一人が怒声を飛ばしてきた。ついでに睨みのオマケ付で。その迫力は、その辺のヤクザなどの比ではない。彼らは忍、任務として幾多の修羅場を潜り抜けてきているのだ。ヤクザなどの睨みとは内包している鬼気の桁が違う……のだが、服装があまりにもアレなため、どうしても間抜けに見えてしまう。

案の定、ナルトは笑いを耐え切れずに噴出してしまった。カカシやサスケが、それを冷めた目で見ているが、そんなことは気にしない。

「あ、でも下忍の俺!」ときに変化を勘付かれるようじや、やっぱり大したことないのか

それどころか、からかいと多少の嘲りを込めてそう言い放った。その言葉に、忍二人は酷くプライドを傷付けられたらしく、眼には憎悪の輝きが灯っている。そして、それが限界に達したのか、彼らは一斉にナルトに襲い掛かろうと体勢を整えた……が、

「忍たる者常に相手を欺くべし。やっぱり大したことなかつたつてばね」

突如出現した二人のナルトに背後を取られ、彼らは遂に、一步も動くことなく無力化されてしまった。気絶し、その場に崩れ落ちる

「一人の忍。サスケやサクラ、勿論タズナには、何が起こったのかすらわからなかつた。

「うつし、撃退完了！ 僕つてばエライ？」

倒れ込んだ一人の忍を一瞥すると、ナルトは得意満面の笑みで力カシに問いかけた。

「あ、ああ。良くやつたぞ、ナルト（全くコイツは、ホントに優秀だな）」

それに対してカカシは、幾分の感嘆を洩らしながら応える。初の実践で、二人の忍を相手にしてのあの手際。とてもじやないが、一介の下忍がとれる行動ではない。カカシは、ナルトの実力に末恐ろしいものを感じずにはいられなかつた。

一方、それを慄然とした表情で眺めているのはサスケである。アカデミーをトップで卒業したはずの自分。しかし、目の前の同期とはここまで差がある。この差は一体なんだ？ あの男のように絶望的な差がある訳ではない。しかし、それは今の自分では絶対に越えられぬ壁。むしろ、こちらの方がより強いショックを受ける。届きそうで届かない。そして、自分の知らぬ間に、一步、また一步と置いて行かれてしまうこの無力感。

（超えてみせる。俺は、ナルトを……必ず！）

復讐という「」の目的は忘れはしない。その為に自分は今生きているのだ。だが、少しの間だけ、優先順位を変えさせて貰う。まずは、ナルトを超す。復讐はそれからだ。

俺は……『「つかは』なのだから

ナルトを見据えるその瞳には、狂氣を孕んだ強い意志の光が灯っていた。

「ところでナルト、お前もしかして忍具作れるのかなあ？」
「んー？ なんで？」

敵を倒した辺りから数キロ歩いた地点、野宿の準備をしていたナルトに、カカシが訊いてきた。あまりに突然といえば突然な質問に、思わずナルトは訊き返してしまつ。

「いやな、お前さつき「範囲限定の起爆札」とか言つてたろ？ そんなモン聞いたことないし、それに試作型みたいなことも言つてたからな。だつたら作つたんじゃないかと、そういう訳」

「ああ、アレのことだつてば？」

カカシの説明を聞き、何のことなのかを理解したナルトは、得意げに話し始めた。

「あれは俺が作つたんじやないつてばよ。エロ仙人がやつたんだつてば。あれつて特殊な術式を既存の起爆札に組み込んで作るらしいんだけど、俺つてば術式とかそういうの苦手でさあ。仕方がないからエロ仙人にやつてもらつたんだつてばよ。それでも完璧には出来なかつたみたいだけど」

「術式……か。なるほどな、自来也様が作つたものだつたか。それなら納得がいく。悪かつたなナルト、邪魔して。野宿の準備に戻つていいぞ」

「ん、わかつたつてばよ」

実際は、自来也が作ったのではなく四代目の遺したものだつたりするのだが、巻物のことを知らないカカシでは、誤解してしまうのも無理はないだろう。それにしても、既にエロ仙人で自分の事だと理解されてしまっている自来也……合掌。

「あ、そうだ。先生、さつきの忍者つてさあ、誰を狙つてきたんだと思つ?」

作業に戻ろうとしていたナルトだが、ふと思い出したようにカカシに問いかけた。タズナの体がピクリと跳ね上がり、カカシの眉が僅かに持ち上がる。狙つて言つていいのではないかと疑るほど、確信をつく言動。カカシがどうやってタズナから聞き出そつかと思つていた事を、ナルトはストレートに問いかけてきたのだ。

(「コイツは、バカなのか優秀なのか、いまいちわからんな

本当に、ナルトは特徴の掴めない部下だった。普段は、頭の中身など何処かに丸ごと置いてきたように使おうとしないナルトだが、こと任務となれば、普段の様子からは考え付かないほどの頭のキレを見せる。まるで、そのときのために普段は脳の活動を止めているかのようだ。

「あー、そうだな。一体誰を狙つてきたんだろうなあ?」

だが、そんな事は今はどうでも良い。ナルトがあまりにあつさりと忍を片付けてしまった為に、一度は失ったチャンス。それを、再び作ってくれたのだ。この機を逃す手は無い。

カカシは、多少わざとらしくタズナに眼を遣りながらそつと言つた。ナルトも、タズナに視線を遣つている。数瞬ばかりの静寂。だが、二つの己の心内を見透かすような視線に、遂に耐え切れなくなつた

のだろうか？ タズナが、ふいに掠れるような声を洩らした。

「何もかもお見通し、か。これ以上は無駄じやううな。……そういうべきの忍が狙つておったのは、間違いなくワシジやうつ」

「え、え？ ちょっと待つて。それって、どういふこと？」

タズナの言葉を聞くと同時に、サクラが驚愕の声を挙げた。それはそうだろう。先程、カカシに忍同士の戦闘はないと言われたばかりなのだ。まあ、実際には起こつてしまつたわけだが、あれで終わりだとタカを括っていた。だが、今の話の流れから推測するとなまじ頭の回転が速いサクラだけに、その答えがわかつてしまつたのだ。

「つまり、任務ランクに偽りがあつたという事だ。この先再び、忍との戦闘もあり得る」

つまりは、そういうことだ。この任務はCランクではなく、Bランク、もしくはそれ以上の任務だつたということになる。

「タズナさん、これは一体どうしたことですか？ 依頼内容の虚偽申告は、こちらとしても非常に困るのですが」

カカシは、攻めるようにタズナに問いかけた。当然だろう。任務ランクが間違つているとなると、里としても非常に困るので。通常、Cランク任務ですら、経験を積んだ下忍に、中忍の隊長で組まれた班が行うのだ。今回のように、下忍になりたての新米がそれを行うことは、非常に稀である。その上、Bランクともなれば中忍以上の忍で組まれた班が行うのが当然なのだ。下忍がやる事などまずありえない。失敗すれば、それだけ里の名に傷が付くのだから当たり前だ。

「理由は、大体想像がつきます。波の国の現状は、木の葉にも情報が入っていますしね。ですが、それならそれでこちらにも対処の使用があつたんです。何故本当の事を言つて下さらなかつたんですか？」

沈黙を守つているタズナに、更にカカシが問い合わせる。その口調には、強い憤りが含まれていた。

「すまんな。確かに、眞実を告げてしまった方が良かつたのかもしれん。Jランクと言つてしまえば、希望するレベルの忍者が来てくれんこともわかつとつた」

「なら「じやが！……それでもワシには、いや、ワシ等にはそうするしか方法がなかつたんじや」「何故……」

悲壮感が漂うほどの、タズナの訴え。カカシも思わず、口をつぐんでしまつ。よほど切迫した状況のようだ。タズナは更に続ける。

「波の国の現状は、アンタも知つておるのじやろ？　あの国は、今暗闇の中をさまよつとるのじや。人々の目からは光が失われ、国全体が活氣を失つとる。あの、ガトーのせいだな」

「え！　ガトーってもしかして、あの世界有数の大金持ちの……」

「そうじや、そのガトーじや」

苦渋の表情で語つていくタズナの言葉の中に出てきた人名に、サクラが声を挙げた。

ガトー。その筋では有名な名前だ。表向きは海運会社として活動しているが、裏ではギャングや忍を使い麻薬や禁制品の密売、果ては企業や国の乗っ取りと言つた、悪どい商売を生業としている男である。

「一年程前、ヤツは波の国に田を付けた。周りを海に囲まれた島国国家。海運業を営むヤツにとっては、絶好の場所じゃったのじやうつ。財力と暴力をタテに入り込んできたヤツは、あつといつ間に島の全ての海上交通・運搬を牛耳つてしまいおつた」

タズナの声に、強い憤りが籠る。

「元々、海路でしか他の国と行き来の出来んかった国じや。そこを押さえられてしまえば、自由に貿易したり他国に言つたりする事も出来ん。ガトーは、波の国の要である交通を独占し、いまや富の全てを独占しある」

そこで一呼吸おくと、タズナは力強く言葉を紡いだ。

「そんなガトーが、唯一恐れるもの。それが、今ワシらが作つとる『橋』なのじや」「……なるほど」

そこまで黙つて話を聞いていたカカシが、口を開いた。

「今まで海上交通しかなかつた波の国に、新たに陸路が追加される。海上交通なら、港を押さえてしまふどうとでもなるが、陸上となると、ガトーといえどもさう簡単には手は出せなくなる。それで、橋が完成してしまつ前に、指導者であるあなたを殺そうとしている、と、そういうことですか」

「つむ。お主らにますまんと思つとる。ワシの勝手な都合のために本来遭わんでも良じ危険な田に遭わせてしまつ」

タズナは、そう言つて深々と頭を下げた。カカシは頭を搔きながら

ら複雑な表情をしている。自分より年が上の人間に頭を下げられると、なんとなく居たたまれない気持ちになってしまったのだ。

「別に、良いんじゃないの、先生」

そんな中、一人、ナルトが声を挙げた。その表情はどことなく暗い。

「ここのままおつちゃんを見捨てたら、後味悪いし、依頼金の方は橋が完成してからの出世払いってことで構わないでしょ？」

淡々とした口調でカカシに告げるナルト。いつもと変わらないよう見えるが、その言葉には妙な圧迫感がある。

「まあ、そうだな。依頼金の方は俺の一存では決められないが、ま、後で火影様に掛け合つてみよう。任務はこのまま続行する。それでいいな、お前ら」

だが、カカシはそれに気づかなかつたようだ。少し困った様子で、ナルト達三人に確認をする。サクラは少々浮かない顔をしていたが、まあ、概ねは了承のようだ。サスケとナルトは言うまでもなく、この時点で、任務の続行が決定した。

「と、いう訳で、任務は続けさせてもらいます。ですが、知つている情報は全て教えて下さい。それによつて、任務の成功確立も上がりますので」

「わかった。本当に、ありがとう

そういうて、タズナは再び深く頭を下げた。

だが、この時は誰も気付いてはいなかつた。ナルトが、ガトーの名が出る度に、その表情を暗くしていった事に。その心の奥底に、激しい憎悪が渦巻いている事に……。

第十話「その男、再不斬」

「タズナ、どうやら此処までは気付かれてないようだが……」

警戒を滲ませた瞳で、周囲を見回す。

「念の為、マングローブのある街水道を隠れながら、丘に上がるルートを通る」

「……すまん」

緊張に硬くなつた声を発する船頭に、頭を下げるタズナ。危険を承知で、それでも船を出してくれた事に対する、感謝の気持ちだ。

ここは、波の国の沿岸附近。ナルト達一行は、タズナの友人の小船で、ここまで来ていた。波の国は島国国家。陸の交通路がない以上、水上を移動するしか手はなかつた。それも、霧に紛れ、エンジンを切り、手漕ぎでだ。自分の国に変えるだけで、護衛がいて、なあここまで警戒を必要とする。一体木の葉に来るまで、タズナはどれだけの修羅場を潜り抜けてきたのだろうか？ 意外とスゴイ老人なのかもしれない。

「もうすぐ到着だ。準備してくれ」

船頭が、小声で指示を出す。トンネルのような穴を抜けると、マングローブの森が見えた。中は薄暗く、潜む場所も多い。待ち伏せには絶好の場所だ。

「オレは此処までだ。それじゃあな、氣をつけろ」

「ああ、超悪かった」

軽く挨拶を交わすと、船は霧の中へと消えていった。

「さて、これからワシの家に向かう。護衛、よろしく頼む」「わかつています。ここからは、敵の襲撃も十分予想されます。私が先頭を歩きますので、タズナさんはその後ろを。サスケとサクラを両脇に付け、ナルトを後ろに配置させます」

軽く指示を出したカカシは、警戒しつつ、歩き始めた。その後を、タズナ、サクラ、サスケ、そしてナルトと続く。

(……見られているな)

カカシは、辺りに鋭い視線を飛ばした。上陸した時から感じる何者かの視線。だがそれでいてこちらにその居所を悟らせない。それどころか、まるでこちらを誘い入れるかのような感じすら受ける。カカシという木の葉でも屈指の忍相手に、このような真似が出来るということは、相手は確実に上忍クラス。それも相当の手練だ。

(少し、厄介な事になってきたな)

カカシは、更に周囲へと感覚を張り巡らせた。どこから襲われるか判らない恐怖。自分だけならばどうとでもなるが、背後には護衛対象と教え子達がいる。彼らを危険にさらすわけにはいかない。久しぶりに感じる冷たい緊張感に、否応なく集中力は高まっていく。

「来たかッ！」

瞬間。カカシは既に動き出していた。木々の間をすり抜けて飛来

する巨大な刀。それが一行に襲い掛かる寸前、カカシの足が、その刀の腹を捉えていた。きりもみしつつ、高々と空中へ舞い上がる刀。

「跳ベツ！」

次の瞬間、カカシは後ろの四人に向かつて叫んでいた。訳もわからぬまま、近くの木の上に飛び移るナルト達。その後、カカシのいる場所、つまり先程までナルト達がいた場所を、巨大な水の竜が襲いかかつた。

息を呑むナルト達四人。あの巨大さでは、木の上にいるこちらまでその余波を受ける事になる。それに、カカシもタダでは済まないであろう。

しかし、カカシは動じない。腰のポーチからクナイを一本取り出すと、それにチャクラを込め始めた。青白い光が、そのクナイを包み込む。そして跳躍。頭上から襲い来るその竜を、カカシは頭から尾にかけて真つ二つに切り裂いた。形を崩し、地上に降り注いでいく大量の水。

だがそれすらも、襲撃者にとつては単なる布石に過ぎなかつた。

「なかなか頑張つたが、終わりだ」

突如、後ろから声がかかつた。冷たく、重い声だ。反射的に振り向くと、そこには先程の刀を振り上げている大男が立つていた。狙いは、タズナだ。

「くつ！」

ナルトが振り向きざまに回し蹴りを繰り出しが、

「遅い」

男は左腕でナルトの顔面を強打し、残りの腕でタズナを切り伏せた。縦に真つ二つにされたタズナは……だが、次の瞬間には煙となって消える。

「何！？」

「残念だが、終わりにはまだ早いな」

僅かに動搖した男に、一体いつ現れたのか、カカシが強烈な蹴りを叩き込んだ。その威力に、吹き飛んでいく男。だが、蹴り自体は刀で防がれたようだ。ダメージは殆ど無いようで、男は空中で巧みに姿勢を変えると、両の脚で水の敷かれた地面に難なく着地した。

「影分身とはな。流石にやるじゃないか」

男は、カカシを見上げると皮肉気に片眉を持ち上げた。そして横へと視線を向ける。

「それに、まさかこんなガキが影分身を使うとは思わなかつたぜ。少々油断していたようだ」

そこには、無傷のナルトと、タズナが立っていた。もつとも、タズナはナルトに背負われているのだが。

「霧隠れの抜け忍、『桃地再不斬』か。まさかこれほどの大物とはな。少々骨が折れそうだな」

言いながら、地上へと飛び降りてくるカカシ。その額宛は正常な位置まですり上げられており、いつもは隠れている左目が露になっている。

「ふん、『写輪眼』の力カシか。相手にとつて不足無し、といったところだな」

力カシの左目に浮かぶ、巴形の模様を見やりながら、再不斬は刀を構えなおした。その表情には、一片の隙もない。

「そりやどーも。こちらとしちゃあ、このまま帰つてもらいたいところだけど、そもそもいかないんだろーな」

「当たり前だ。こちらも正式な依頼で動いてるんでな。プロとして、仕事はこなす」

軽薄な声音で、再不斬と会話する力カシだが、こちらも隙はない。いつでも戦闘に移れるように、全身の筋肉は、ギリギリまで張り詰めている。

「ナルト、タズナさんを連れて上へ上がれ。俺一人でやる」「了解」

特に何の反論もせず、ナルトは上へ上がった。自分があの場にいても、邪魔になるだけだと判断したからだ。相手の実力は力カシと同程度。つまり自分よりはずつと上だ。もしナルトが再不斬とサシで戦れば、三分以内に勝負は付くだろう。

「おいナルト、力カシの眼に浮かんでる模様は……」

「ああ、写輪眼だつてばよ。俺も始めて見たつてば。師匠から聞いて、存在は知つてたけど

「（バカな、あれは『うちは一族』の中でも一部の家系にだけ、現れる特異体質だぞ）」「

木の上に上がるなり、サスケが食いかかつてきた。ビリヤー、力カシの「写輪眼」が気になるようだ。

「どうこいつことだ。何故アレを力カシが持つている」

「俺が知るかつてばよ、そんなもん」

「ね、ねえ。さつきから気になつてたんだけど……」

サスケが更にナルトに食つて掛からうとする中、サクラが、遠慮がちに会話に入ってきた。

「シャーリングガンつてなんなの？ すごい物なの？」

「……『写輪眼』」

サクラの問いかけに、サスケが静かに口を開いた。

「所謂、瞳術の使い手は全ての『幻・体・忍』術を瞬時に見通し、跳ね返してしまう眼力を持つと言われている。『写輪眼』とは、その瞳術使いが特有に備え持つ瞳の種類の一つだ」

そこで、一呼吸置く。

「だが、『写輪眼』の本当の怖さは別にある。『写輪眼』は、その眼で相手の技を見極め、『コピー』することが出来る。つまり、術を盗む事が出来るんだ」

「そ、そんなにスゴイ物なんだ」

いつになく真剣に語るサスケに、違和感を感じながらも、サクラは驚いたような咳きを洩らした。

「ま、実際どんな物かは見てれば判るつてばよ

そこに、ナルトの声がかかる。その瞳は、先程から地上の二人を捉えて離さない。まるで、二人の動き全てを目に焼き付けようとしているかのようだ。もはや、護衛の事など頭から抜け落ちてしまつているのかも知れない。

そんな事を思うサスケとサクラだが、一人とも、ナルトに促されるかのようにして、下の戦いへと視線を落とすのであった。

「さて、と……いくぞ」

先に動いたのは、力カシだつた。ゼロの状態から、一気に最高速まで加速する。半瞬にも満たず、再不斬の元へ到達した力カシは、手にしたクナイを一閃させた。斜め下から襲い来る鋼鉄の刃。だが、再不斬は慌てもせず、刀の柄の部分でそれを受け止める。刃が柄に食い込み、力カシの動きが、一瞬だけ鈍る。その一瞬が、このレベルの戦いでは致命的となる。その隙を見逃さず、繰り出された再不斬の蹴りは、力カシの鳩尾に直撃する。くの字に折れ曲がった力カシの顔面に、すかさず強烈な殴打を叩き込む。ミシッと確かな手応え。だがしかし、その手応えは次の瞬間には無となつて消え失せる。影分身だ。

「何度も同じ手が通用すると思つてているのか！」

後ろに現れた力カシを、力任せに蹴り飛ばす再不斬。どうやら、影分身は読まれていたようだ。だが、

「まさか、思つちゃいないよ。それはただの時間稼ぎだ」

蹴り飛ばされた力カシは、これも煙となつて消え、そこから少し離れた位置に、力カシの姿が現れた。

「丑・申・卯・子・亥・酉・丑・午・酉・子・寅・戌・寅・巳・丑・未・巳・亥・未・子・壬・申・酉・辰・酉・丑・午・未・寅・巳・子・申・卯・亥・辰・未・子・丑・申・酉・壬・子・亥・酉」

手早く何かの印を結んでいく力カカシ。

「その印は！？」

その印に見覚えがあるのか、再不斬は、眼を見開いた。そして、術は発動する。

「水遁・水龍弾の術！」

現れたのは、先程の水の竜。先程とは打って変わって、今度は再不斬へと襲い掛かる。

「ちい、やつてくれる。だが、俺にこの術は効かん！」

後ろへと跳び去りながら、再不斬は印を結んでいく。そして、竜が到達するか否かと言つタイミングで、

「水遁・屹立水柱の術！」

再不斬の前方に巨大な水柱が立ち、水竜を下から突き上げた。その圧力に、形が保てなくなり、崩れる水竜。水滴が、雨のように辺りに降り注いだ。

「クク、まさかあの時に既にコペーしていたとはな。流石はコペー忍者力カシ、見事だ」

「お褒めに預かり光栄だな。だが、そろそろ本氣でいかせて貰うわ」

余裕の笑みを浮かべる再不斬に、カカシは不適に言い放つ。

「そうか、それじゃあ　俺も本氣になら」

それに対しても再不斬は、未だ余裕の笑みを崩さず、構えた。

戦いは、まだ始まつたばかりだ……。

（す、凄え……）

下で繰り広げられている凄まじい戦いを目の当たりにしたサスケは、そう思わずにはいられなかつた。多種多様な忍術、体術の応酬。確かにそれも十分に驚嘆に値する。しかし、もつとも驚くべき部分は、彼ら一人の身のこなしだ。

体の捌き、脚の運び、ありとあらゆる動作に、一切の隙がない。全てが必要最小限に抑えられており、どの体勢からでもすぐに次の行動へ移れるよう、計算しつくされている。実際、彼らの戦いは流れるように滑らかに展開されており、美しくすらある。それは、その計算しつくされた動き故だ。

（俺じゃあ、まだあそこまではできねえ）

サスケは、下唇を噛む。あの動きを「コピー」しようとしても、できない悔しさに。いや、動きのシミュレート自体はできるのだ。どうすれば一番効率が良いのか、どうすれば一番確実なのか。そういう理想の動きは、既にわかっている。しかし、サスケにはまだその動きはできない。何故か？　体の動きが着いていかないのもあるが、最大の要因は絶対的な経験の不足だ。

サスケは、これまで本格的な戦闘の経験というものが殆どない。確かにアカデミーで演習は積んできたが、本当の闘争の前では、正直あんなものはお遊びに過ぎない。命と命の遣り取り、一瞬の油断が即、死に繋がる緊張感。そういうたのをまだ、サスケは体験した事がなかつた。それゆえ、どんなに上手くシミュレートしても、実践に出たら動けない。足りないからだ、覚悟が。どれほど強くと

も、死ぬ事はないだろ？、などと欠片でも思つていれば、それが動きを鈍らせる原因となる。そしてそれは、直接的に死へと繋がつてゆく。

（くそ、俺はこんなもんだつたつてのか！）

激化していく眼下の戦いを半ば睨み付けるよつこしながら、サスケは己の力の無さを悟つた。あの男に一族を殺されてから、自分は死ぬ氣で修行してきた。少なくとも、そう自分では思つていた。だが、実際はどうだ？ 上忍のレベルは、自分の予想をはるか超えた超人的なものであつたし、あまつさえ同期のナルトはその上忍に近い実力を持つている。同年代の奴らより優れている程度で、自惚れている場合ではなかつた。火遁が少し使えるくらいで、満足すべきではなかつた。

（俺は……弱い……）

サスケは考える。

自分の今までしてきた事は、決して間違いではなかつたはずだ。事実、それなりの力は付いた。だが、ナルトとはまだずいぶん差がある。ナルトと今の自分では、立つている位置がまるで違う。あいつとの決定的な差はなんだ？ 考えてみれば、答えはあつさり出でくる。

師の、存在だろ？ やはり、独学では限界があるのだ。誰かに支配されたくないなどと、下らない意地を張つている時ではない。より強くなるためなら、なんでもしてやる。ナルトやカカシと、同じ田線に立てるのならば、プライドなど捨ててやる。

（俺は、もっと強くなりたい）

サスケの中の強くなりたいと思う衝動。今まで負のベクトルを向いていたそれが、初めて、前向きな思考へと変わった。ただ、己を高める為に強くなりたい。自分の野望とは別に、サスケは、そう思つたのだ。果たしてこれが良い兆候なのか、それともそうではないのか。それは、時を待つしかない。

(ちい、水がある状態では此方が幾分不利だな)

再不斬に牽制の手裏剣を投げつつ、カカシは思案する。再不斬は元霧隠れの忍、つまり水遁を主に使う。水遁系の術は、体内で水を作り出しても良いのだが、それではチャクラを多く消費してしまう為、周りに水があつた方が効率的に戦える。よつて、今の状況は、かなり再不斬にとつては有利と言えるものだった。

(仕方がない、まずはこの水を……)

逆を言えば、この水さえなければ再不斬の水遁の威力は落ちるとのことだ。カカシは、口元を隠しているマスクを引き下げる、一般人では最早視認する事すら不可能な速度で印を結んでいく。そして、

「……消す！ 火遁・火龍炎弾の術」

マスクを引き下げたカカシの口から、巨大な火龍が出現し、再不斬を襲う。荒れ狂う火龍は一直線に再不斬へと突き進んでいく。灼熱のその身は、地表を覆う水を蒸気へと変貌させた。

「フン、しゃらくさい。水遁・水龍弾の術」

しかし、敵もさるもの。カカシが火龍を放つとほぼ同時、水中から水の龍を作り上げて相殺する。

一瞬の交錯 そして衝撃

消失した一頭の龍に代わり、辺りを大量の蒸氣が埋め尽くした。数瞬の静寂。それを破つたのは、再不斬の重く不吉な歪笑だった。姿の見えない再不斬の声は、何処か愉快氣だ。

「クク、カカシ、お前は二つのミスを犯した」

「何？」

引き下げるマスクを元に戻しつつ、カカシは眉を顰めた。ハッタリ……ではないだろう。そんな真似をするような男ではない。とすると、自分は本当に何かのミスを犯したことになる。

（クッ、何の事だ？）

カカシは、額に嫌な汗が伝うのを感じた。そんなカカシを嘲笑うかのようにして、再不斬は指を一本掲げる。

「まず一つ目。この蒸氣だ」

「蒸氣、だと？」

「そう、蒸氣だ。何か変だと思わないのか？」

再不斬は、辺りに浮かぶ蒸氣を指差した。それにつられるようにして、カカシもそれらに目を遣る。宙に浮かび続ける蒸氣。別段、おかしいところは……いや、

「……浮かび続ける、だと？」

「今頃気付いたか。普通の水蒸気がこんなに長く浮かんでいられるわけがないだろ。これは俺のつくり出した『霧』だ」

再不斬は更に、嘲るように続ける。

「礼を言ひぜカカシ。お前が媒介になる蒸氣を出しててくれたおかげで、少し性質を変えてやれば霧を作り出せた。無駄にチャクラを食わずには済んだぜ」

「くそ」

カカシは、己の迂闊さを呪つた。そう、水蒸氣も基はといえば水、つまり再不斬の術の媒介だ。それにもつと早く気付くべきだったのだ。そうすれば、まだ対策もあった。しかし、もう遅すぎる。霧はどんどん濃度を増していき、もう、視界はほぼゼロだ。

「カカシ。俺の特技、何だか知ってるか？」

「……無音殺人術」

「そう、正解だ。俺の本業は暗殺。視覚を使わず、聴覚やその他の感覚のみでターゲットを掴むサイレントキリングが、俺本来の戦闘スタイルだ。つまりカカシ、お前は既に俺の獲物なんだよ」

不気味に咲笑する再不斬に、カカシは顔を顰めた。状況は最悪。完全に相手の術中に嵌つてしまつている。こいつなつてしまつた以上、こちらも気配を読んで行動するしかないが、再不斬もプロだ。気配の絶ち方は完璧で、上手く追うことができない。加えてこの霧だ。相手の姿が見えないという状況は、不安と焦りを倍増させる。

冷たい汗が、背中を流れた。瞬間、背後で一瞬膨れ上がった殺氣に、カカシはその場を飛びのいた。直後、先程までカカシがいた空間を、巨大な刀が両断する。あと一瞬、いや、半瞬でも遅れていれば、カカシの体は頭から真っ二つにされていただろう。

「クク、今のを避けるとは。流石は、木の葉の看板忍者といったところか」

再び姿を消した再不斬の、感心したような声が霧の中に響き渡る。だが、今のは厳密に言えばカカシが避けたわけではない。再不斬が、態々避けられるレベルに押さえたのだ。

切りかかる寸前に、一瞬だけ現れた殺氣。再不斬ほどの腕の持ち主なら、それすらも消し去る事は十分に可能だつたはずだ。しかし、再不斬はあえてそれをしなかつた。何故か？

見せ付ける為だ。いつでも殺せるということを。どんなにあがいても、全て手の平の上で踊らされているだけだということを。そして同時に、次は殺すという宣言でもある。

「おつと、そういうえば、お前の二つ目のミス。まだ教えてなかつたな」

更に、再不斬は愉しげな口調で続ける。カカシは、その声の出所を探ろうとするが、山彦の術を使われているせいで居場所を特定する事ができない。

「二の二つ目が、お前の致命的なミスだ。カカシ……」

再不斬がそう告げたその時、上方から甲高い叫び声が降つてきた。サクラの声だ。まさか、という考えがカカシの脳裏をよぎる。

「お前、俺が独りで殺りに来たと思つたか？」

その無慈悲な一言は、背後から、死への斬撃を伴つて振り下ろされた。

時間は、少し遡る。

「どうなってるの？ 下が全く見えないわ」

突然、霧によつて下の様子が見えなくなつたナルト達は、混乱していた。これでは下で何があつても対応できない。カカシのことだから万が一は無いと思うが、再不斬に強襲されたときのことを鑑みると、安心もできなかつた。

「なあ、あの先生大丈夫なのか？ 超心配なんじゃが」

今まで黙つていたタズナが、心配そうに聞いてきた。

「ああ、カカシ先生なら多分大丈夫だつてばよ。あんなんでも一応上忍だし、超強えーんだぜ？」

それに対しナルトが、軽くタズナの口調を真似しながら応えた。それによつて、僅かながら、タズナの表情にも笑顔らしきものが戻る。しかし、

「危ない！」
「きやあああああああ

次の瞬間、サクラの悲鳴が辺りに木霊した。目の前で、ナルトの手から血が噴出すのを見つめたのだ。そして、タズナの微かな笑みも、眼前に差し出されたナルトの手に刺さつた、針のような武器を目にして消え去つてしまつ。

「ぐッ」

ナルトは辺りを確認すると、手に刺さったその武器を勢い良く引き抜いた。地が噴出するが、増血丸を飲み込んで収める。

(くそ、完全にやられた)

ナルトは、内心で悪態を吐く。完全に裏をかかれた。最初の再不斬の登場、あの時点で、既に布石は打たれていた。必要以上に派手な登場。あれで、完全にナルト達の意識は再不斬一人にいつてしまっていた。他にもう一人いるなんて、考えもしなかった。

「ナルト！」

サクラが慌てて駆け寄つてこよつとするが、

「来ちゃダメだ、タズナのおつちやんの傍にいて！」

ナルトがそれを制する。相手の実力の程は、先程の千本の投擲スピードで大体把握できた。サスケよりは強いだろうが、自分よりは下だ。だが、手に負傷を負つてしまつて、影分身位しか使えない今の状態ではかなり不利だ。一応サスケもアテにはなるのだが、それでもまだ少々厳しい。当然、カカシのアシストも期待できない。今この状況では、タズナの傍を離れるわけにはいかなかつた。

「今のに反応しますか……完全に虚を突いたはずなんですが、甘く見すぎていましたかね」

少年、といふのには少々高すぎるその声の主は、ナルト達の背後

の木陰から現れた。仮面で顔を隠している為性別まではわからないが、背格好からして、ナルト達と同年代くらいだろう。

「お前がさつきの攻撃の主か？」

サスケが、仮面を睨みつけながら凄む。その口調には、先程の攻撃に反応できなかつた事に対する苛立ちが滲み出していた。

「ええ、そうです。まさか、防がれるとは思つてませんでしたけどね」

仮面は、関心したたよつた口調で話す。だが、同時に、まだ幾分の余裕も感じさせた。

「ですが、防いだ彼は手に傷を負つてしまつた。それでは印を結べないでしょ？ となるとこちらがかなり有利だ。どうです、その人を大人しく渡してくれませんか？ 仕事なもので」

タズナを指差しながら、仮面は、表面上丁寧に告げてくる。だが、その裏には強烈な殺氣が込められており、サクラなどは完全に畏縮してしまつていて。

「フン、思いつきり殺氣を叩きつけながら言つ台詞か。答へはノーダ。こつちだつて仕事なんだ」

だが、サスケには効かなかつたようだ。こちらも殺氣を込めて、相手に言葉を叩きつける。

「ふう、しようがないですね。僕は君たちを殺したくはありません。ですが、少々痛い目に遭つてもらいます」

「だから殺氣を叩きつけながら言つ台詞か！」

仮面の少年が動いた瞬間に、サスケも動き出していた。互いの武器は千本とクナイ。

空中で交錯する白と黒の影。そして、互いに別の木の枝へと着地する。被害は……サスケが頬に掠り傷、仮面の少年が仮面へのヒビ、実力はほぼ互角だ。

「フン、その程度でどうにかできると思っていたのか？」

「いえ、まさか。これからが本番ですよ。」

サスケの挑発を軽くいなすと、仮面の少年は片手を胸の前に持つていき、印を結び始めた。

「馬鹿な！ 片手印だと！？」

あり得ない光景に、サスケの目が驚愕に見開かれる。ナルトも、軽く眉を顰めた。

「秘術・千殺水翔」

仮面の少年が軽く手を振り上げると、下から宙へと舞い上がってきた水が、無数の千本へと変化していった。

「避けてください、死にますから」

そして、無数の千本は猛スピードでサスケへと直進していく。四方から襲い来る無数の水の千本。逃げ場は無い。

（殺られる！）

サスケが、そう思つた瞬間だつた。突如目の前に現れた黄色の影が、襲い来る千本を全て叩き落していく。そのスピードは、サスケや仮面の少年の比ではない。

「勝手に諦めてんなよサスケ。まだまだこれからだぜ?」「チツ」

目の前で不敵にそう言い放つナルトに対し、サスケは何とも言えない複雑な表情を作つた。強いて言えば、照れているような、だろうか。

「あれを全て叩き落としますか。やはり、君は危険だ」

そんな二人を見て、仮面の少年は一度目の感心したような声を発した。だが今度は、先程よりもより、真剣さを増している。

「殺したくはないんですが、仕方がありません。本気でいきます」

そういうて、仮面の少年はナルト達が今まで見たことも無い印を結ぶ。すると、今度は下から上がってきた水が、千本ではなく巨大な鏡に変貌していく。

「秘術・魔鏡氷晶」

無数の鏡が、ナルトとサスケの三百六十度全てを取り囲む。

「これからは、君たちは何もできない……ただ、僕の攻撃を受けるだけだ」

不気味な言葉を残し、仮面の少年は、鏡の中へと入り込んでいつた……。

世界が、白銀に満たされる。前後左右、そして上下。全てが、白に覆われていた。

「何だ……」「れ

ナルトが、驚愕の呻きを洩らした。口には出さないながら、サスケも同じ心境だ。今まで、見たことも無い術だつた。ナルトも、自來也から多種多様な それこそありとあらゆると言つても良いほどの 術を受けた事がある。だが、この術はその内のどれにも当てはまらない。

白ずっと、周囲への警戒心は高まつていぐ。そして、

「避ける！」

僅かな空氣を裂く音と共に、千本が飛来する。狙いは的確、確實に急所を狙つてきている。しかもその投擲スピードは、先程とはまるで別物。視認することすら難しい速さだ。

ナルトは、反応の追いつかないサスケを蹴り飛ばすと、その場でクナイを構えた。後方から襲い来る凶器は約十本、先程の術に比べれば無いのも当然である。おまけに、狙いの的確さ故に来る場所が特定できる。いくらスピードが速いとはいえ、全てを叩き落すことは可能であった。

「流石ですね。これも防ぎますか。でも、今のは大体全力の七割位です。投げる本数も抑えておきました」

だが、仮面の少年は、無慈悲な言葉を投げかける。全力の七割、ナルトは戦慄を覚えた。今の速さは、自分が全力で投げたクナイの投擲スピードに匹敵するのだ。つまりこの少年は、それ以上の速さで千本を投擲できるという事になる。上には上がいるといつ言葉を、ナルトはあらためて思い知った。

「サスケ、悪いけどお前の面倒まで見て遣れそつも無いってばよ。

自分で何とかしてくれ」

「当たり前だ、だれが手前Hの面倒なんかになるかよー。」

警戒を促すナルトの言葉に、ナルトの立っているすぐ下の枝で体を起こしたサスケは、己を鼓舞するように怒声で応える。実際、サスケは恐怖していた。先程の千本の襲撃には、反応しきれなかつたおそらく、ナルトに蹴り飛ばされていなければ何本かはこの身に刺さつていただろう。

「次は全力でいきます。死にたくないなら、急所は庇つてください」

その言葉が届くか否かの瞬間、ナルトの視界に僅かな影が映った。それを目で確認する愚は犯さず、横へ跳ぶ。先程まで立っていた場所に、何本もの千本が刺さつた。下を見ると、サスケの身に何本も刺さっているのが見える。どうにか急所は避けたようだが、それでも厳しい状況には変わりない。

「これも避けましたか。ですが、そちらの彼は無理だつたようですね。それに、あなたも見切ることはできなかつたようだ」

ナルトのジャンパーの裾に刺さっている千本を指差して、少年は静かに告げる。

「！」は僕の世界。氷に閉ざされた、脱出不可能な魔界。その上、君たちの足場は上下に枝が三本あるだけ。もはや、君達には……」「ふざけろ！ ！」の程度で殺られてたまるか」

少年の言葉を遮つて、サスケは怒号を叩き付けた。全身から訴えかける痛みを無視して、もはや組みなれた印を結んでいく。

「鏡」と溶けやがれ！ 火遁・豪火球の術」

サスケの口から、巨大な炎の塊が吐き出された。その大きさと速度は、以前力カシに放つたときよりも更に上がつていて。

直撃。数枚の氷の鏡は、中の少年もろとも豪火に呑まれて消え失せた……。よう見えたのはしかし、サスケ幻想に過ぎなかつた。

「な……」

直前までサスケの顔に浮かんでいた喜色は消え去り、代わりとばかりに、険しい表情が浮かぶ。鏡も少年も、まるで何事も無かつたかのように、そのままの姿で健在だった。

「残念でしたね。炎で溶かそうという考えは悪くありませんでしたが、あの程度の火力と衝撃ではこの鏡を溶かす事などできはしませんよ」

少年の言葉に、サスケは一つ歯軋りをした。言外に実力不足と言われているようなものだ。一体世の中には何人化け物がいやがる、と、サスケは内心毒吐いた。

一方、サスケに密かに化け物呼ばわりされた事など露も知らない（実際、化け物だつたりもするのだが）ナルトは、状況の把握に普段使わない頭をフルに活動させていた。

（まずいな。あのお面の術、並の火力じゃ効果が無いみたいだつてばよ。やるんなら火龍炎弾位のレベルは欲しいけど……ああ、やっぱり他の術の修行もしつければ良かつた）

ナルトは、今更ながらに後悔した。自来也からは、一切術の修行は受けていない。というより、四代目の巻物に書かれている術以外を習得する事は、ほぼ全面的に禁止されていた。何故か、というのは聞いていない。ナルトは、自来也を信頼しているし、尊敬もしている。こと修行に関しては、自来也の言う事に間違いはないとわかつてしているのだ。

ナルトにとつて、自来也は言わば父であつた。顔も知らないもう一人の父とは、別の。

（まあ、覚えてたところで今のこの手じゃ使えやしないし、覚えてる術で何とかしてみるつてばよ）

だから、と言つわけではないが、ナルトはとりあえず開き直つた。そう、どのみち今の状態では術など使はしないのだ。使えもしない術に頼るより、今できる範囲内でこの状況を開拓する方法を考えたほうが、よほど建設的である。

使える術は影分身と変化の一つ。忍具は、手裏剣八枚、クナイが五本、煙玉一個に起爆札が一枚だ。幸い、チャクラにはまだ余裕がある。術に換算して、多重影分身三回と影分身十五体、変化十二回くらいだ。命が懸かつた場合はこの限りではないが、それだけは絶対にしたくなかった。それでは、あの時から何も成長していない。あの、狐に侵された時から……。

「サスケ、まだ動けるか？」

「誰に向かつても言つてやがる、当たり前だ」

嫌な考えを頭の中から閉め出し、ナルトはサスケに確認の言葉を送った。帰ってきたのは、怒声にも近いサスケの声。ナルトは、それに対して苦笑をもらし、周囲を見渡した。

無数に浮かぶ鏡に映る、仮面の少年。どれか一つが本物で、残りは鏡に映つてはいるだけだろう。その証拠に、先程から一方向からしか攻撃はきていない。その本物さえ探し出せば、まだ勝機はあるはずだった。だが、そのナルトの予想は裏切られる。

ナルトとサスケは、敵の攻撃は必ず一定の方向からだと思い込んでいた。それゆえ、攻撃が来る方向さえ気をつけておけば、少なくとも致命傷だけは避けられると思つていたのだ。だが、

「これで君たちの動きを確実に止めます。悪く、思わないで下さ」

今度の攻撃は、先程の『千殺水翔』という術のよう、あらゆる方向から飛来してきた。意表を突かれ、ナルトもサスケも、一瞬反応が遅れる。

「ぐつ……」

サスケの口から、苦鳴が洩れる。頭部への攻撃だけは何とか避けたものの、体の至るところに千本が刺さつていて、はつきり言つて、これ以上戦闘を続けられるような状態ではない。

一方、ナルトの方も、ダメージを負つていて、見た目はサスケと似たようなものだ。だがそれでも、脚へのダメージを最小限に留めたのは、やはりナルトなればこそだった。

「残念ですが、この中に実態などありませんよ」

少年は、諭すよつに言葉を紡ぐ。

「鏡に映る僕。そのどれもが偽りであり、また、どれもが実体でもあります。つまり、鏡に映っている僕は、どれもが僕自身であるとということです」

その声には、勝利を確信した響きがあった。サスケはもはや戦力として数えられないし、ナルトも、満身創痍の状態のはずだ。次で仕留められる、その思いが、少年に普段ならしないようなミスを犯させた。自分の術を態々解説するというミスを。

「ふーん、つまり鏡に映つてるのは全部お前本人つてこと?」「…………そりです」

突如、軽薄そうな声でナルトが問いかけた。それに不審を感じながらも、少年は首肯する。それが、仇となつた。

「つまり、鏡を全部ぶつ壊せば良いってことだ」「ええ、そうです。ですが、それができないのは先刻証明済みのはず。残念ですが……」「多重影分身の術!」

少年は、それ以上言葉を紡ぐことができなかつた。目の前に現れた無数のナルト。数を数えるのも馬鹿らしい。それは、到底あり得る光景ではなかつた。一体、どれだけのチャクラを込めればこれだけの分身が生み出せるのか?

現れた分身たちは、それぞれ枝にぶら下がつたり木にしがみついたりしている。いまや世界は、白銀から金色へとその色を変えつつあつた。

「そんな……馬鹿な」

「さて、それじゃ、悪いけどもう少し田舎でもいいつてばよ。腹も減ってきたんでね」

少年の呆然としたような咳きを、ナルトは無視した。代わりに、作り出した分身たちを一斉に跳躍させる。

「く、そんな事をしても意味はありませんよ。この鏡は絶対に壊せません」

少年は、焦ったような口調で、自分の優位を主張した。そう、サスケの放った火遁ですら、ビクともしなかったのだ。分身をいくら作り出したといひで、それがどういひができるはずはなかつた。

「さて、それはどうかな？　この至近距離で何かが爆発でもしたら、結構ヤバいんじゃない？」

「何を言つて……まさか！」

鏡に取り付いた分身の一人の言葉に、少年の顔が、その仮面の下で驚愕に彩られた。見れば、別の場所にいた筈のサスケを、ナルトが抱えている。

「そのまさかだつてばよ。……ハアツ！」

ナルトがチャクラを込めた瞬間、生み出した分身たちが一斉に爆発した。辺りに鳴り響く凄まじい轟音が、爆発の威力の強さを思い知らせる。それが、至近距離で爆発したのだ。当然、仮面の少年の方もただでは済まなかつた。

「く……まさか、こんな手を使つてぐるとは」

周囲を囲んでいた鏡は全て消えてなくなり、ギリギリのところで逃げたのか、仮面の少年は少し離れた木の枝の上で膝を付いていた。服はところどころ破れ、仮面は碎け散つて、額から血を流した素顔を曝け出している。やはり、ダメージは免れなかつたようだ。

「は、ざまーみろつてばよ

一方、ナルト達の方も、口では余裕そうなことを言つてゐるが、サスケは氣絶しており、ナルトもチャクラの使い過ぎで立つてゐるのがやつとだ。

元々影分身は、チャクラによつて擬似的な外殻を作り、その中でチャクラを循環させることによつて作られてゐる。そのため、強い衝撃によつて外殻を壊されたり、チャ克拉の供給をカットされたりすると、その存在は消えてなくなるのだ。逆に多くチャ克拉を与えすぎると、循環が上手く行われなくなり、その形を保てなくなる。先程の術も、それを応用したものである。

風船を思い浮かべてもらえば判りやすいのではないか。風船は、空氣を入れれば大きくなつていくが、入れすぎると破裂してしまう。それと同じだ。つまり、外殻が耐え切れないほどのチャ克拉を一気に流し込むのである。流し込まれたチャ克拉は外殻の中に一時的には留まるが、やがて耐え切れずに外殻を突き破り、外へと発散する。そうする事によつて生み出されるエネルギーが、風船よろしく、分身を爆発させるのだ。無論、これを行うには、緻密なチャクラコントロールとチャ克拉の量が必要となる。まして多重影分身との併用である。人並み外れたチャ克拉を持つナルトであるからこそできる技だつた。

「まさか、こんな芸当ができる人間がいるとは思いもしませんでした。ですが、仕事は完遂させてもらいます」

膝立ちの状態で息を切らせていた少年が、突如、跳躍した。狙いはタズナだ。ナルトとサスケは動けない。傍にはサクラがいるが、彼女にどうにか出来る相手でもなかつた。

「僕の勝ちだ」

少年の手にした千本が、タズナの首筋に突き刺さつた。首筋から血を噴出し、その場に崩れ落ちるかと思われたが、そうはならなかつた。

「ぐ、また影分身か」

少年は、悔しそうに下唇を噛んだ。ナルト達の方を見やると、無傷のタズナが立つてゐる。先程少年が千本を突き刺したのは、タズナ本人ではなく、ナルトの影分身が変化した姿だつたのだ。

ナルトは、分身を爆発させるのに全てのチャクラを使わなかつた。使つた後、自分が動けなくなるのは明白であつたし、そうなれば仮面の少年がタズナを狙うであろうと思つたからだ。それゆえ、ナルトは爆発の最中、分身の一つをタズナの元に遣り、すり替えておいたのだ。そして、タズナを連れた影分身は上方の枝へと飛び移り、機を見て本体と合流する。ナルトの機転は、ほぼ完璧だつた。

「本当にやつてくれますね。ですが、僕も手ぶらで帰るわけにはいきません」

だが、ここでナルトの甘さが露見してしまつ。タズナのことばかりを気にかけていたナルトは、サクラの存在を失念してしまつていたのだ。そこに、少年の付け入る隙があつた。

果然と立ちすくんでいるサクラに目を付けた少年は、目にも止まらぬ速さでその首筋に手刀を叩き込み、気絶させてしまった。

「この方は人質として預からせてもらいます」
(しまつた!)

ナルトが気付いた時には遅かった。少年は、既にサクラの体を抱え込み、下の霧の中へと身を躍らせている。チャクラも切れ、体中に傷を負つた今の状況では、追いかけようも無かつた……。

第十一話「戦闘 前編」（後書き）

こちらでもクイズを一つ。回答は感想のほうに書いていただけないと幸いです（お前はどこの営業者だ（笑））

この中で、今後のカッティングとして正しいのはどれでしょう？

- 1、ヒナタはどうしたあ！ ナルト×サクラ
- 2、やっぱりこれでしょ？ サスケ×サクラ
- 3、禁断の恋なのか！？ カカシ×サクラ
- 4、ヒュンケルとママの如く 仮面の少年（笑）×サクラ

さあ、どれ？

当たった方には抽選で、外伝のリクエスト権プレゼント！（いられ
え）
では、今後もよろしくお願ひします。

このクイズは終了致しました。

「死ね、カカシ！」

死角からの強烈な斬撃。速さ、重さ、角度。そして、何よりも重要な『間』。全てが、完璧と言える一撃だった。

もう一人の襲撃者を匂わせる発言をし、それにカカシの思考を集中させ、間を置いて答えを与えた瞬間に僅かに見せる、動搖。それを逃さず、完全に死角から襲撃したはずだった。

絶対不可避のタイミング。だが、それでもなお、カカシは反応した。

「ぐつー！」

肉を断つ感触が、刀を通して伝わってくる。だが……浅い。

（反応しただと！？）

肩口から腰の付近にかけて、深い傷を負つたものの、急所だけは避けている。再不斬ですら、完全に決まったと思えるタイミングで、だ。恐ろしいまでの反応速度。やはり、舐めてかかる相手ではない。

「やつてくれるな、カカシ。まさか今の一撃で仕損じるとは思わなかつたぜ」

「……ツク、褒め言葉と受け取つておいつか

思わず発した賞賛の言葉に、息を切らしつつカカシは返答する。やはり、急所は避けたと言つてもかなりのダメージを負つてゐるようだ。

(くそ、まずいな)

ポーチから取り出した増血丸を噛み砕きながら、カカシは顔を顰めた。流石に、霧隠れの鬼人と呼ばれるだけのことはある。これ程の高レベルな水遁忍術に、並外れた体術、それに加えて暗殺に関するスキルの高さ。このまま後手にまわり続けていては、殺られるのは確実に此方だ。それに、ナルト達の事も気になる。そう簡単にやられるとは思わないが、出来れば早く助けに言つてやりたい。となると、残された道は一つ。

(此方から攻めるしかないか……)

だが、それが一番の問題だつた。視界は再不斬の作り出した霧で覆われ、ほぼゼロに等しい。加えて、此方が耳や鼻で動きを察知しようとしても、再不斬の動きはほぼ無音な上、刀に着いた血は下に敷いてある水によつて洗い流されてしまう。それに対し、再不斬は此方のたてるどんな小さな音も聞き逃さず、完璧に動きを把握してくれる。闇雲に動き回つても、殺されるだけだ。

(……待てよ、水か!)

だが、そこで力カシはあることに気付いた。そう、今、地面上には水が敷かれている。それゆえ、力カシはチャクラを使ってその上に立つてゐるし、それは再不斬も同じはずだ。ならば、まだ打つ手は残されている。それも、とびつきりの上策が。

「再不斬！ この戦いにもそろそろ飽きてきた。悪いが、終わらせてもりづぞー！」

力カシは、どこにいるかも知れない再不斬に向かって思いつきり叫んだ。今思い付いた策に、上機嫌になつたわけではない。こう叫ぶ事によって、相手の中に「何かあるのか?」という考えを芽生えさせ、迂闊に近づき難くさせたのだ。無論、再不斬相手では僅かな時間を作り出すに過ぎないだろうが、その僅かな時間が、力カシにとっては何よりも重要であった。

「フン、つまらんハッタリを。勝ち田などどこにもありはせん!」

案の定、再不斬の嘲り声は聞こえてきたが、攻めて来る様子はない。力カシは、静かに右腕にチャクラを集中させ始めた。集められた膨大な量のチャクラは、次第に体外へと漏れ出し、視認できるまでになる。それに、強く、念じる。

本質は雷……変化しろ、目を覚ませ。高く鳴け、遠く轟け、強く輝け! 我が右腕は、雷光の一撃!

力カシの右腕が、青白く発光する。小刻みに鳥のさえずりのような音が聞こえ、右腕の雷は、より強い光を放つた。これこそが、コピ一忍者と呼ばれるはたけ力カシ唯一にして最強の固有忍術。掌に集中させたチャクラを、己の持つ雷の性質変化によって変質させ、更にそれを凝集させる事によって、爆発的な威力を生み出す超高等忍術。その名は……

「 雷切! 」

力カシは、右腕を足下の水へと叩き付けた。高く水飛沫が舞い、腕の雷が、周囲へと分散し始めた。水の通電性の高さは、今更言つまでもないだろう。放たれた雷は四方へ分散し、周辺を手当たり次第に蹂躪していく。水面を這い、時に弾け、時に跳ねる。手近な気をなぎ倒し、尚も暴れ狂う。そこはもはや、雷によって支配された世界。逃げ場などどこにもない。

「ぐああああああ！」

絶叫は、背後からやってきた。それが耳に届くと同時に、跳躍する力カシ。言つまでもなく、叫び声は再不斬のものである。叫び声によつて、居場所が特定できたのだ。

「カ……ガ、シイイ！」

再不斬の傍に着地、いや着水すると、憎悪の籠つた視線が送られてきた。雷をその身に浴びたせいか、体は辛うじて動くようだが、呂律が回つていない。

「術に溺れたな、再不斬。こんな破られ方、想像もしていなかつただろ？？」

緩慢な動きで近づいてくる再不斬に、力カシは静かに告げた。その双眸には、冷たい光が灯つている。

「いのー！」

再不斬が怒りに任せて刀を振るうが、如何せん遅い。そのスピードはもはや、ナルトはおろか、サスケですら避けられる程度でしかなかつた。言わざもがな、力カシが当たるはずもない。傷を負つた今の状態でも、十分に余裕を持つて避けける。

「術を過信しそぎたな、再不斬。確かに、さつきの術に嵌れば、お前を捕捉することはほぼ不可能だらう。補足出来なれば攻撃も出来ない、つまりお前は絶対安全のはずだつた。だからお前は俺を殺す事に集中しそぎて、周囲への警戒をおろそかにしてしまつたんだ」

再不斬を組み伏せながら、カカシはクナイをその首筋に当たった。再不斬はなんとか抜け出そうとするが、感電の影響が残る今の状態では、カカシから抜け出す事はかなわない。

「再不斬、お前の敗因は一つだ」

言いながら、カカシは視界の隅に、薄くなつた霧の中を近づいてくる影を捉えていた。十中八九、再不斬の仲間だろう。

「お前らは、この俺とアイツらの力を舐めすぎた」「……確かに、そうかもしませんね」

カカシの言葉に答えたのはしかし、再不斬ではなく、近くに降り立つた先程の気配の主だった。呼吸の荒さからみて、相当消耗しているようだ。ナルト達にやられたのだろう。視界の隅に移る姿や声から判断して、おそらくまだナルト達と同年代。まだ少年と言える年齢で再不斬と行動を共にしているのは確かに賞賛に値するが、だが、驚くには至らない。

カカシ自身、そのくらいの年齢の頃には既に中忍になつていたし、ナルトの例もある。こと忍者の強さと言う点に関して、年齢は全く関係ないのだ。一握りの才能に、恵まれた環境、そしてそれに見合う努力が伴えば、いくらでも強くなれるのである。

「またこいつびくやられたようだな、白」

「ええ、すみません再不斬さん。負けてしました」

カカシに組み敷かれた状態で、再不斬はその少年の方を向いた。顔には、何故か薄ら笑いが浮かんでいる。白と呼ばれた少年の方も、特に悔しそうでもなく負けたと口にした。どこか、不自然。

今、再不斬達は圧倒的に不利な状況にあるはず。再不斬本人はこうして力カシに命を握られているし、背後の少年にしても、実力は力カシには遠く及ばない。そんな状況で、なぜこつも余裕を持つていられる？

「悪いが、俺もまだ依頼が済んじやいなんだ。そろそろ終わらせてもららうぞ」

「残念ですが、あなたに再不斬さんは殺せませんよ。ここは退いてもらいましょう」

「……何？」

力カシが再不斬の首を断とうとしたとき、白が突然、声をかけた。反射的に目を向ける力カシ。その目に映つたのは、見覚えのある桃色の長い髪。

「サクラ！」

「動かないで下さい！　この娘を殺しますよ？」

咄嗟に駆け出そうとした力カシに、白の怒号が飛んだ。腕に抱えられたサクラの首筋には、千本が添えられてある。力カシは、己の迂闊さを呪つた。先程再不斬に言つた事が、そのまま帰つてきてしまったのである。

力カシは、自分の優位を信じきつてしまつていた。後から来た少年は、自分には到底及ばない実力だつた。ナルト達に負わされたと思われる傷もあるため、注意すべきは再不斬だけ、と言う意識が力カシの中に芽生えてしまつていたのだ。それが、結果的にサクラの存在を見逃す結果となつてしまつた。ただ一点のみに意識を集中し、周囲への警戒を怠る。まさに、先程再不斬に言つた言葉そのままであつた。

「さあ、早くしてください。このままこの状態が続ければどうなるかは、あなたもわかっているはずです」

白の言葉に、カカシは黙つて従つしかなかつた。そう、このままこの膠着状態が続けば、再不斬が感電の影響下から脱してしまいかもしれないのだ。そうなつてしまえば、圧倒的に不利なのは自分。人質を取られた状態で、再不斬と戦つて勝てる自信はない。完全に、形勢は逆転していた。

（くそ、どうする？ サクラを見捨てるか？）

カカシは自問する。忍としては、それは当然の判断。仲間の命などよりも任務を完遂することを最優先とする。それが、忍の在り方である。

ここでサクラを見捨てても、再不斬と白を殺す。後の事を考えれば、それがベストな選択のはずである。だが……

（いや、駄目だ。俺はあの時に学んだはずだ）

答えはノーである。思い起されたのは、かつての親友の言葉。

仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ

忍としては、このような考え方のほうがクズである。だが、カカシはこの言葉を強く心に刻んでいる。

『木の葉の白い牙』と称され、彼の前では『三忍』の名すら霞むと言われた父。里からの信頼も厚く、英雄と呼ばれ、カカシも、そんな父を心の底から尊敬していた。だが、任務中に仲間を優先して里に大損害を与えたとして、彼の名声は地に落ちる。忍のクズと呼ばれ、里人からは白眼視され、そして……彼は何も言わずに自らの

命を絶つた。

カカシには、どうしてもわからなかつた。何故、父は命を絶つたのか。父のしたことは、忍としては、確かに間違いだつたかもしれない。だが、一人の人間としては、決して間違つた行為ではなかつたはずだ。そのときカカシは、既にそのことを理解していた。だが、ならば何故、父は自害したのか？　それは自らの過ちを、認めるということなのだろうか？

答えは出ず、カカシは悩み続けた。

そんな折、任務中に親友の放つた「仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ」と言う言葉に、カカシは初めて、父と、父のした行為を肯定されたような気がした。そして同時に、父の死の、真実を垣間見たような気がした。

忍として生きる事に、父は恐らく、苦悩し続けていたのだろう。心を殺して忍としての責務を全うするか、心を守り、人間として死ぬか。そして、父は人間として死ぬ事を選んだのだ。

父は、良くも悪くも人間臭すぎたのだろう。それゆえ、己の在りように戸惑い、苦しみ、そして、死という名の救済を得た。それはそれで、立派な事だとカカシは思う。名誉や地位を捨ててまで、人間である事を選んだのだから。

だが、自分は違う道を歩もうと思う。例え報われなくとも、自分は人間で在り続ける。その道に、どんな苦難が待ち受けているとも、必ず生き続けてみせる。己の親友の為にも。

だから、今ここで、サクラを見捨てるなどと言つ事は出来ない。左眼の「輪眼も、それを許さない。

「フン、木の葉の忍は甘ちやんだな。忍としてはクズも良いとこだ

立ち上がつた再不斬は、手足の具合を確かめつつ、皮肉気にそう言い放つた。感電の影響は、大分薄れてきたようだ。

「白、来い」

力カシからは田を離さず、再不斬は白を呼び寄せた。サクラを抱えたまま、ゆつたりとした足取りで、白は再不斬の下へと歩いていく。力カシは、それをただ黙つて見ているしかなかつた。

「さて、ここでお前とあのガキ共を殺しても良いんだが、それじゃあ面白くない」

白が傍らまで来たのを確認すると、再不斬は愉快気に口を開いた。怪訝そうな顔をしている力カシに、再不斬は更に告げる。

「力カシ、取りあえず今日のところまでだ。この小娘は預かっておくぜ」「ぐ、待て……！」

背を向けて、姿を消した再不斬と白を追おうと、足にチャクラを集めようとした瞬間、力カシの体が、糸が切れた操り人形のように前方に崩れ落ちた。いくら動かそうとしても、もはや身体はピクリとも動かない。

（くそ、何もこんなときには！）

力カシは「」の体を呪つた。長時間に渡る写輪眼の使用に、雷切。暗部を抜けた後、殆ど使うことのなかつた二つの大技を、久しぶりに、それも一度に使つてしまつたのだ。修行を怠つていたわけではないが、そこは実戦との差。おまけに今回は水上での戦いだつたこともあり、常にチャクラを消費し続けていた。如何な力カシと言えども、流石に限界だつた。

「この小娘の命が惜しければ、お前達だけで波の国のある小屋に来い。おつと、爺は置いて来いよ？ 良いな。くれぐれも、爺は連れてくるな。一週間、時間をやひ。良く考えるんだな」

薄れゆく意識の中、嘲るような再不斬の声だけが、頭の中に響いた。

第十四話「強さ」

力カシが目覚めたとき、既に一行はタズナの家に到着し、力カシは客間の座敷に敷かれた布団に寝かされていた。

「……ぐ、」
「……」

軽い頭痛を感じながら、力カシは身を起こす。これが、『写輪眼の副作用なら、指一本動かせなかつただろうが、今回の場合は単なるチャクラの使い過ぎだ。休んでる間に、少しほはチャクラも回復できただようで、実戦レベルではまだまだ厳しいだろうが、日常レベルでは普段と遜色ないくらいに動けるようになつていた。筋肉の劣化も進んでいないようだし、寝込んでいたのは一日から一日程度だろうと、力カシは中りを付ける。

「おお、起きたようじやな、先生さん」

混濁する記憶を整理していると、襖が開き、タズナが入ってきた。その声には安堵の響きがある。

「大丈夫か？ 一日も目を覚ましたたが」「ええ、心配をお掛けしまして。大分、身体の方は良くなつたみたいですね」

心配げに問いかけてくるタズナに、微笑しながら答えると（口元はマスクで見えないが）、力カシは立ち上がり、腕や足の具合を確認する。その間に、タズナが力カシが倒れてからることを簡単に教えてくれて、そのおかげで再不斬の他に追っ手がなかつたことも判つた。

大体の現状を把握し終えたところで、カカシの頭に素朴な疑問が浮かんだ。自分の部下二人の事だ。タズナが無事にここにいて、尚且つ追っ手も無かったことを考えれば、二人とも無事でいるのだろうが、やはり気になるところである。

「ああ、あの二人なら修行とか何とか言つて出かけたわい」

その問いについて帰つてきた答えに、カカシは少し、顔を顰めた。タズナを無事に家まで連れてきたのは評価するが、その後の護衛を疎かにするのはいただけない。確かに襲撃の可能性は低いだろうが、だからといって依頼者をほっぽりだして修行に行くとは、

(こりや、帰つてきたら説教の必要があるな)

と、カカシが考えたところで、タズナの後ろから、何故か修行に行つているはずのナルトが姿を見せた。

「お、カカシ先生起きたつてば？」

驚くカカシをよそに、一カツとばかりに笑うナルト。

「じゃあもう俺つてばいらないかな？ カカシ先生、あと、よろしく

そしてそのまま、カカシに向かつて片手を上げると、煙を上げて消えてしまった。そこに至つて、カカシはようやく事態を飲み込んだ。

先程のナルトは影分身だつたのだ。確かに、影分身なら護衛にも使える上、本体との連絡も容易に取れる。なかなか、何も考えていよいよで周到な奴だ。

おそらく、今ナルトにはカカシが目を覚ましたことが伝わったはずだ。何処で修行しているのかはわからないが、そう遠くではないはずだ。五分もすればここに戻つてくるだろう。そしたら、今後の事を話さなければならぬ。サクラの事も気にかかるところだ。

「あの、お食事はどうされますか？ よろしければお作りしますが」と、そこまで思考を進めたところで、襖のところから遠慮がちな声が聞こえてきた。目を遣ると、エプロン姿の女性が立っている。年齢からいって、タズナの娘といったところだろう。まさか、妻ということはないはずである。

「……では、お願ひします。出来れば私の部下の分もお願ひしたいのですが」

「ええ、任せてください。ちゃんと三人分作りますから」

一瞬の逡巡の後に、紡ぎ出されたカカシの言葉に、その女性は柔和な笑みで答えた。そして、腕まくりをしながら部屋を出て行く。

「今はワシの娘のツナミじや。……ちなみに人妻じやからな？」「いや、それは良いんですけど」

タズナの戯言を軽くいなし、カカシはこれから行動について頭をめぐらせ始めた。一番の問題は、再不斬たちに攫われたサクラだ。助けに行かないわけには行かないのだが、そうすれば今度はタズナの命が危険に晒される。自分が残ればタズナの命はまず大丈夫だろうが、ナルトとサスケでは再不斬に対抗できない。非常に不味い状況だ。一方を取ればもう一方が危険になる。

まあ、どちらにせよ、ナルト達と相談してから決めるしかない。すべては、それからだ。

「ただいま、カカシ先生起きてるつてば？」

ナルト達が帰ってきたのは、それから丁度五分後のことだつた。何故かサスケに無数の切り傷があるが、一体どんな修行をしていたのであろうか？一抹の不安が残るところではあるが、この際それは置いておこう。

「ナルト、サスケ、すまない」

カカシは、一人に頭を下げた。突然の行為に、ナルトもサスケも咄嗟に言葉が出ない。

「俺はサクラを、目の前にいながら取り戻す事が出来なかつた。その上、再不斬も始末し損ねてしまつた。本当に、すまない」「いや、先生のせいじゃ ないつてばよ」

自分の失態について謝罪するカカシに、ナルトが声をかけた。その表情は、苦渋に満ちている。

「サクラちゃんを攫われたのは、俺の責任だつてば。俺の判断が甘かつたから、サクラちゃんは攫われたんだ」

唇をかみ締め、自噴に駆られ、声を震わせるナルトの横で、サスケもまた、己への憤りに、顔を歪めていた。あの時、結局サスケは何も出来ないまま氣絶し、あまつさえナルトの荷物になつてしまつた。自分がもう少し上手く動けていて、あの少年を牽制する事だけでも出来ていれば、サクラは攫われなかつたかもしれない。そんな思いが、サスケの心に重くのしかかっていた。

「あの、お食事作りましたけど、どうされますか？」

立ち込める重たい空気を押しのけるようにして、遠慮がちなツナミの声がかかった。どうやら食事の用意が出来たようである。

「ああ、いただきます。よし、一人とも、まずは腹ごしらえだ。今後の事はその後に話し合つべ」

それに便乗し、場の重たい空気を払拭するかのようにして、力カシが少し陽気な声を出した。そして、ツナミの後に続いて、さつさと部屋を出て行ってしまう。残された三人は、一様に顔を見合わせた後、肩を竦めつつ部屋を出て行つた。

食事を食べ終えると、力カシ達はまず、お互の情報を交換し合つた。あの霧の中での戦いでは、お互いの状況を知る術は無かつたのだから、これは当然である。そして、一通りの情報交換を終えた後、話題はサクラの処遇と移つていつた。

「さて、サクラのことなんだが……」

普通、こういう場合には護衛を優先させ、捕まつた忍は見捨てられる。アカデミーの教科書にも載つてゐる、忍の基本だ。優先すべきは任務の達成、そのためには多少の犠牲には目を瞑らなければならぬ。当然、そのことはナルトもサスケも知つてゐる。だからこそ、二人の表情が憂慮のそれへと変わる。力カシが、サクラを見捨てるのではないか、と。

「アイツは必ず助け出す。通常なら見捨てるのが正しい判断だらうが、前にも言つたとおり、仲間を大事にしない奴はクズだ、と俺は思つてゐる。だから、サクラは助ける。言つておくが反論は許さん。異論がある奴は前に出ろ、殴つてやるから」

だが、そんな一人の憂慮を吹き飛ばすかのよにして、カカシは力強く宣言する。サクラは助ける、と。進んでカカシに殴られたい人間などいないうし、もともと一人はカカシの意見に賛成である。異論などでようはずも無く、一人ともどことなく嬉しげな表情だ。それを見て、カカシは一つ頷くと、タズナに目で問いかけた。

「これで良いか？」と。ナルト達にあは言つたものの、最終的な判断は、依頼人であるタズナに委ねられる事になる。カカシも流石に、依頼人まで自分の都合を押し付ける事は出来ないのだ。

「ワシにも異論はない。自分の保身の為にあんな可愛い讓ちゃんを見殺しにするほど、落ちぶれちゃおらんわい」

だがそれに対し、優しげな微笑でタズナは応じた。それに、カカシも思わず顔を綻ばせる。正直、この依頼人に突つ撥ねられたらどうしようかと考えていたのだが、流石はこの国の希望と呼ばれる人物、といったところか、度量の大きさを見せられた。

サクラを救出する事が決定したところで、カカシは再び今後のことについて話し始めた。

「再不斬の言う事を信じるなら、時間的な猶予は一週間。既に二日過ぎたから実質五日だ。この五日間をフルに使って、サスケは修行に当たれ。指導は俺がやつてやる。ナルトはタズナさんの護衛だ」

「」の指示に、修行マニアのナルトは不満げな顔をしたが、カカシの一睨みで沈黙した。そしてサスケも、ナルトと同じく苦い顔をす

る。こちらは、ナルトとの差を改めて思い知られた為である。通常、任務中に修行など滅多にしない。まして今回は護衛任務である。護衛対象をほっぽり出してまで、修行を課せられるということは、つまりそこまで状況は切羽詰つており、自分は足手まといなのだと言つ事である。

力カシもサスケのそんな心情には気づいていたが、あえて何も言わずに説明を続ける。サスケには、これから成長のために一度、挫折を味わわせなければならない。いつもはクールに振舞っているサスケだが、意外と精神的に脆い部分がある。天才と呼ばれる人種にはよくある話だ。幼いころから天才と言われ続けてきた為、自然と、エリート意識のようなものが芽生えてきてしまうのである。ましてサスケは、名門『うちは』の出。否応無しにその意識は高まつてしまたはすだ。だがそれ故に、自分より上を行くものが現れたときに、対処の方法がわからず、混乱してしまう。植えつけられたエリート意識が、自分の上を行くものを認めず、排除してしまおうとするのである。そして最終的に、自分の中でその問題を解決する事が出来ず、混乱の中で自我の崩壊に至る可能性すらあるのだ。力カシは、自分の教え子にそんな末路を辿らせたくは無かつた。

「恐らく、再不斬の狙いは俺たち、いや、俺をタズナさんから引き離す事だろう。この中で再不斬とともに渡り合えるのは俺だけだからな。サクラを助け出そうと思えば、当然俺が行かなきゃならんと言つ事だ」

「でも、そしたらタズナのおっちゃんが危なくなるつてばよ

「そうだ。俺達が全員サクラの救出に向かえば、その間タズナさんは完全な無防備になつてしまつ。かといって、俺が一人でサクラを救出に向かつたとしても、人質がいる上に再不斬とあの少年だ。救出は難しいだろ。お前たちでは言わずもがなだな。それに、いくらお前たちが強いといつても、ガトーは数で攻めてくるだろ。再不斬レベルの奴が来ることはないだろが、はつきり言つてその場

合に、お前たちだけでタズナさんを守りきれるかは疑問だ」

力カシの淡々とした説明に、ナルト、サスケ、タズナは、一様に顔を顰める。状況は、彼らが考えていたよりも深刻なのだ。サクラを救出しようと思えば、最低でも一人は必要になる。再不斬は力カシが相手をするとして、もう一人の少年を牽制する役が必要なのだ。だが、そうするとタズナの護衛が一人となり、タズナを守りきれない可能性が出てくる。先程力カシも言ったように、いくらナルトやサスケが強いとは言つても、百を超すような敵を相手にしては、勝つ見込みは薄いと言わざるを得ない。その上、タズナを護衛しながらでは、ほぼ絶望的である。それに、力カシが確実に再不斬に勝てるとは限らないし、敵が再不斬とあの少年だけとも限らないのだ。こうして並べ立ててみても、良い要素が一つとしてその中に入つてこない。殆ど勝負は決まつてゐるようなものだ。

「さて、もう判つてゐると思うが、現段階で圧倒的な不利に立たされている俺たちには、どうしても戦力の増強が必要になるわけだ。だが、里からの増援は見込めない。そこでサスケ、お前にはこの五日間で、最低でもあの少年と互角に渡り合えるだけの実力を身に付けてもらつ」

「何？」

三人が暗い表情で押し黙つてゐる中で発せられた力カシの言葉に、サスケが反応した。たつた五日。たつた五日で、力カシはサスケをあの少年と同じレベルにすると言つたのだ。

「おい力カシ、お前アイツの実力がどれ程のモンか……」

「わかつてゐよ。さつきお前らから大体の話は聞いたし、俺自身も対峙した。今のお前じやあ、ボロボロに負けるのがオチだらうな」「……」

流石にそろははつきりと言われて、サスケも憮然とした表情を浮かべてしまう。それが事実である事を理解していくも、やはり自分の今までの修行がすべて否定されるようで、認めたくはないのだ。

「だがな、サスケ。それはあくまで今の時点のことだ。お前にはその圧倒的な実力差を、ほんの少しのキッカケで無くしてしまえるほどの才能が眠っているんだ。俺が保障する」

「……そのキッカケを、お前が与えてくれるっていうのか？」

「そうだ」

サスケは、再び憮然とした表情で黙り込んでしまった。実のところ、サスケは未だ半信半疑でいたのだ。カカシはなにやら確信を持っているようだが、五日という短い時間で、あの少年との実力差がそう簡単に埋まるとはどうしても思えなかつた。それに、カカシのいう才能というのも、どうにも信じきれない。確かにサスケはうちは一族の出で、周りからも天才だと言われて育つてきた。しかし兄のイタチは、年齢差を考えずとも、自分とは比べ物にならないほどの強さを誇つていて、直ぐ傍にナルトという規格外がいる。カカシはまだ、サスケが高い自尊心を持つていると想えているようだが、実のところサスケは、既に自分の才能を信じられなくなつていた。

どんなに修行しても、イメージですら決して追いつけない兄。化物のような強さを持つ上忍。そしてそれに近い実力を持つチームメイト。更には仮面の少年との戦いでの完敗。これらの要素が、サスケの心に劣等感を巣食わせ始めていたのだ。特に、仮面の少年の存在が大きかつた。ナルトだけならばまだ、サスケも自分を騙し通せたかもしれない。だが、仮面の少年の登場は、サスケに、今まで目を背け続けてきた真実を目の当たりにさせる。サスケと同年代で、サスケよりも強い忍びなどいくらでもいるという真実を。それは、

サスケの自信を粉微塵に打ち碎くには十分なものだった。だが、

「おいカカシ、本当にそれで強くなれるんだな?」

「ああ、この修行が上手くいけば、お前は飛躍的に強くなる。それこそ、あの仮面の少年にも負けないくらいにな」

「判った。やつてやる、それで強くなれるんだつたらな」

サスケはまだ、強くなるということを諦めたわけではなかつた。確かに、まだサスケの頭の中は混乱したままだ。だが、その混乱の中でもたつた一つだけ、決して揺るがずにサスケに訴えかけてくる感情がある。憎しみだ。あの日、自分から全てを奪い去つたあの男に対する、底知れぬ憎悪。それだけは、確固として心の奥深くに根付いているのだ。だからこそ、サスケは強さを求める。その行為が無駄だ、とは思わない。大体が、サスケは今まで自分自身を勘違いし続けていたのだ。サスケが求める強さは、別に世界で一番である必要はない。ただ、己の兄よりも少しだけ、強ければそれで良いのだ。だから、他人はどうでも良い。とにかく、自分の目指す強さは、兄の一歩上。そこなのだ。

無論、こういった考えを持ち始めたからといって、ナルトやあの少年に抱いている劣等感が無くなる訳ではない。しかし、それが薄れていっているという事もまた、事実であった。

「先生、俺には何か無いの? 一撃で地割れを起こすような怪力を身に付ける、とか、舌やら首やらが伸び放題になるような術を覚えろ、とか。ね、ね、何か無い?」

とそこで、今まで黙っていたナルトが、突如としてカカシに自分にも修行を課すように詰め寄つた。ナルトが口走っている内容に、聞き覚えがあるような気もしたカカシだったが、それが頭に浮かぶことは無かつた。というより、ナルトが肩を掴んで物凄い勢いで搖

さぶるものだから、思て出せりしても思て出せるものではなかつたのである。

「つだああああ、いい加減揺るのは止めろ！ お前にもちやんと修行はあるから。それも、タズナさんを護衛しながらでも出来るヤツがな」

自分の肩を掴んでいるナルトの手を引っぺがすと、カカシは不敵な笑みを浮かべた。

時は少し遡る。カカシが田覗める一日前の、波の国から少し離れた森にある小さな小屋。

「…………ん、痛う…………！」

その中に置かれた簡素なベッドの上で、サクラは田覗めるのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5681a/>

狐、閃光となりて……

2010年10月12日14時05分発行